

会場案内表

〈第一日〉

開会式	4号館3階431教室
研究発表	Symposia
第1室	0号館7階701教室
第2室	0号館7階702教室
第3室	0号館8階805教室
	第1部門 2号館3階231教室
	第2部門 2号館1階212教室
	第3部門 2号館4階241教室
	第4部門 2号館1階213教室
	第5部門 2号館2階221教室
	第6部門 2号館2階222教室

〈第二日〉

研究発表	Symposia
第4室	0号館7階701教室
第5室	0号館7階702教室
第6室	0号館7階703教室
第7室	0号館7階704教室
第8室	0号館7階705教室
第9室	0号館7階706教室
第10室	0号館6階603教室
第11室	0号館6階602教室
第12室	0号館8階805教室
第13室	0号館8階806教室

特別シンポジウム	4号館3階431教室
閉会式	4号館3階431教室

受付(会費納入)・伝言板・案内	0号館地階入口ホール
一般会員控室	0号館6・7・8階学生ラウンジ

研究発表関係者控室	0号館2階学生ラウンジ
特別研究発表関係者控室	0号館2階ヤマテホール
シンポジウム関係者控室	0号館2階ヤマテホール・ロビー
特別シンポジウム関係者控室	0号館2階レストラン・ボヌール

大会本部	0号館2階ヤマテホール
開催校関係者控室	4号館2階425・426教室

図書展示会場	0号館地階ギャラリー、ピロティ
懇親会会場	2号館1階アリーナ211
喫煙所	キャンパス内所定の喫煙コーナー

各室の配置については巻末**ページ以降の教室配置図とキャンパス案内図をご参照下さい。

日本英文学会第78回大会プログラム

時：2006年5月20日(土)・21日(日)

所：中京大学名古屋キャンパス(名古屋市昭和区八事本町101-2)

第一日 5月20日(土)(会費納入受付は正午より。0号館地階エントランスホール)

開会式 午後1時より(4号館3階431教室)	司会 中京大学教授 細川 眞
<input type="checkbox"/> 開会の辞	会長代行 加藤 光也
<input type="checkbox"/> 挨拶	中京大学学長 小川 英次
<input type="checkbox"/> 第28回新人賞選考結果報告	

研究発表 第1発表 13:45-14:25 第2発表 14:30-15:10
第3発表 15:20-16:00 第4発表 16:05-16:45

第一室 (0号館7階701教室)	司会 京都大学教授 丹羽 隆昭
1. ルネサンスからバロックへ ヘンリー・ジェイムズ後期三部作の創作順をめぐる謎を解く	学習院大学大学院 山口 志のぶ
<hr/>	
	司会 お茶の水女子大学教授 竹村 和子
2. <i>A Wonder Book</i> と神話愛好時代	京都大学助教授 水野 眞理
<hr/>	
	司会 東京学芸大学助教授 若林 麻希子
3. 小説という学校 スーザン・ウォーナー『広い、広い世界』と <i>American Lyceum</i>	筑波大学大学院 杉本 裕代
<hr/>	
	司会 相愛大学教授 山下 昇
4. 『八月の光』 リーナ・グローヴを巡るフォークナーの人種意識	京都大学大学院 山内 玲

第二室 (0号館7階702教室)	司会 青山学院大学教授 折島 正司
1. ジャック・ロンドンにおける「体験」の位相	東京大学大学院 高村 峰生
<hr/>	
	司会 国士館大学教授 松本 昇
2. Negotiating Black Identity in Ralph Ellison's <i>Invisible Man</i> and Percival Everett's <i>Erasure</i>	慶應義塾大学他非常勤講師 Raphaël Lambert
<hr/>	
	司会 学習院大学教授 上岡 伸雄
3. 二つの海戦と「決闘美」 <i>Men at War</i> の“Tsushima”と <i>The Old Man and the Sea</i>	中京大学非常勤講師 柳沢 秀郎
4. 20世紀のアーキテクチュア <i>Tours of the Black Clock</i> のメタフィクション性と時空間の表象	大阪外国語大学大学院 岡本 太助

第三室 (0号館8階805教室)	司会 名城大学助教授 岡崎 正男
1. 文学と言語学の接点 English Conundrums の意味構築を中心に	京都大学大学院 安原 和也
2. 3語複合語のリズムと修飾部という概念	青山学院大学教授 中澤 和夫
<hr/>	
	司会 中央大学教授 新井 洋一
3. アイルランド英語の形態・統語法的諸特徴 John B. Keane (1928-2002) の言語をもとに	京都大学大学院 嶋田 珠巳

SYMPOSIA (13:45-14:25)

第一部門 (2号館3階231教室)

英文学と〈文明化〉の変遷	司会・講師	専修大学教授	末 廣 幹
	講師	大同工業大学専任講師	小 西 章 典
	講師	東北大学講師	岩 田 美 喜
	講師	愛知教育大学助教授	久 野 陽 一

第二部門 (2号館1階212教室)

詩人の詩人論	司会・講師	神戸女学院大学教授	山 田 由 美 子
	講師	放送大学助教授	大 石 和 欣
	講師	明星大学教授	笠 原 順 路
	講師	同志社大学教授	中 井 晨

第三部門 (2号館4階241教室)

19世紀イギリス小説に潜む〈食〉の諸相	司会	奈良女子大学教授	横 山 茂 雄
	講師	京都橘大学教授	南 直 人 (歴史学)
	講師	中京大学教授	岩 田 託 子
	講師	埼玉大学助教授	大 久 保 讓
	講師	明治大学講師	小 宮 彩 加

第四部門 (2号館1階213教室)

「大戦間」の文化研究のために 共同体、ファシズム、精神分析	司会・講師	首都大学東京助教授	遠 藤 不 比 人
	講師	日本女子大学教授	川 端 康 雄
	講師	静岡県立大学短期大学部助教授	中 山 徹
	講師	京都ノートルダム女子大学専任講師	河 野 真 太 郎

第五部門 (2号館2階221教室)

中世ロマンス 文学的研究と語学的研究の壁を越えて	司会	摂南大学教授	今 井 光 規
	講師	広島大学教授	原 野 昇 (フランス文学)
	講師	大阪外国語大学助教授	田 尻 雅 士
	講師	筑波大学大学助教授	山 口 恵 里 子

第六部門 (2号館2階222教室)

言語の研究・教育と脳科学との接点	司会・講師	東北大学助教授	小 泉 政 利
	講師	JST・東京大学研究員	保 前 文 高 (発達脳科学)
	講師	宮城学院女子大学教授	遊 佐 典 昭
	講師 (コメンテータ)	広島大学助教授	酒 井 弘

第二日 5月21日(日) (会費納入受付は午前9時30分より)

研究発表

第1発表 10:00-10:40 第2発表 10:45-12:25
第3発表 11:35-12:15 第4発表 12:10-13:00

第四室 (0号館7階701教室)

司会	帝塚山学院大学名誉教授	今 西 雅 章
1. <i>Troilus and Cressida</i> における知覚理論	学習院大学大学院	松 岡 浩 史
2. 『トロイラスとクレシダ』の終幕の不安 甲冑とヘクターの死	関西大学非常勤講師	若 狭 智 子

司会	東京女子大学教授	楠 明 子
3. ‘Yond gull Malvolio’ <i>Twelfth Night</i> における‘Gull’の表象	東京大学大学院	内 丸 公 平
4. “Rome itself hath tried” Marston の Antonio 二部作における「新しいローマ」としてのヴェネツィア表象	東京大学大学院	酒 井 も え

第五室 (0号館7階702教室)

司会	鳥取大学助教授	和 田 綾 子
1. ‘Beware of being misled by his <i>Paradise Lost</i> ’: Blake, <i>Europe</i> , ‘On the Morning of Christ’s Nativity’	神戸大学助教授	佐 藤 光
2. 情念の耐えられない重さ 情念の生理学からブレイクの「毒の木」を読む	日本女子大学他非常勤講師	石 塚 久 郎
司会	筑波大学教授	今 泉 容 子
3. Anna Barbauld’s ‘To a Little Invisible Being...’: Maternity in Poetry and Medicine	ウォータールー大学助教授	Tristanne J. Connolly

第六室 (0号館7階703教室)

司会	愛知学院大学教授	山 口 均
1. 『クライテリオン』のなかの「荒地」	大阪市立大学非常勤講師	出 口 菜 摘
2. Donne から G. Herbert へ T. S. Eliot の Via Media の視点から	弘前大学教授	村 田 俊 一
司会	青山学院大学教授	佐 藤 亨
3. 神話的空間からウェールズ共同体へ Dylan Thomas, <i>Portrait of the Artist as a Young Dog</i> をめぐって	大阪大学大学院	仲 渡 一 美
4. Heaney と Dante ^{ダイアレクト} 方言 から ^{ヴァナキュラー} 土地言葉へ	学習院大学大学院	鷲 塚 奈 保

第七室 (0号館7階704教室)

司会	中央大学教授	大 田 美 和
1. コケットリーと女子教育 18世紀後半、英国における「改心するヒロイン」再考	学習院大学助手	藤 澤 陽 子
2. Disenchanted the Fairy Tale: A Reading of <i>Jane Eyre</i>	東京大学大学院	野 津 友 里 子
司会	中央大学教授	新 井 英 永
3. テスのセクシュアリティ再考 テスの悲劇説明における語り手の動機との関連で	山形大学他非常勤講師	鈴 木 淳
4. 誠実な建築と不誠実な顔 <i>A Laodicean</i> 論	東京都立大学大学院	福 原 俊 平

第八室 (0号館7階705教室)

司会	山形大学助教授	中 村 隆
1. 観察される心理と身体 「グイネヴィアの弁明」における dramatic monologue の変奏	大阪大学大学院大学院	関 良 子
2. ホモソーシャルな男たちと穢された女 『ドラキュラ』における Mina Harker	三重大学助教授	宮 地 信 弘

SYMPOSIA (10:00 – 13:00)

第七部門 (2号館4階241教室)

アメリカ文化・国家と恐怖 テロはどこにあるのか？

司会	一橋大学助教授	新田啓子
講師	慶応義塾大学教授	巽孝之
講師	テキサス大学オースティン校教授	Susan Napier (日本文化研究)
講師	一橋大学教授	鵜飼哲 (フランス文学・思想)

第八部門 (2号館2階221教室)

多重化するジャンルの詩学

司会・講師	駒沢大学教授	富士川義之
講師	立教大学嘱託講師	関口千亜紀
講師	獨協大学教授	原成吉
講師	詩人、多摩美術大学教授	平出隆 (言語芸術)

第九部門 (2号館3階231教室)

南の周縁から問う“アメリカ”

司会・講師	明治大学教授	管啓次郎
講師	東京外国語大学教授	今福龍太 (文化人類学)
講師	琉球大学助教授	喜納育江
講師	青山学院女子短期大学助教授	斉藤修三

第十部門 (2号館1階213教室)

中世文献の電子ファイル化とその利用

司会・講師	東京慈恵会医科大学助教授	小原平
講師	オランダ芸術科学院ホイヘンス研究所研究部長	Karina van Dalen-Oskam (オランダ語学・文学研究・コーパス言語学)
講師	京都大学助教授	家入葉子
講師	大阪大学助教授	吉川史子

第十一部門 (2号館1階212教室)

形式と意味の接点

司会・講師	学習院大学教授	高見健一
講師	筑波大学教授	廣瀬幸生
講師	東京大学助教授	西村義樹
講師	筑波大学大学助教授	岡田禎之

特別シンポジウム 5月21日(日)午後1時30分～3時30分 (4号館3階431教室)

このままでいいのか大学英語教育

司会	東京大学助教授	斎藤兆史
講師	元国連事務次長	明石康
講師	慶応義塾大学教授	大津由紀雄
講師	東北大学教授	原英一
講師	立教大学教授	鳥飼玖美子

閉会の辞

中京大学教授	吉川寛
--------	-----

司会	横浜国立大学助教授	宮崎かすみ
3. <i>A Passage to India</i> に見る他者理解の可能性	神戸大学大学院	西川和佳子
4. <i>The Longest Journey</i> と <i>Maurice</i> における「自然」	東京都立大学大学院	石井義秀

第九室 (0号館7階706教室)

司会	同志社大学助教授	山本 妙
1. Fashion/Modernism: Virginia Woolf and the Question of the Literary Marketplace in <i>Orlando</i>	英国ヨーク大学大学院	秦 邦生
2. 『波』におけるスーザン再考 自然、母性、共同体	青山学院大学大学院	横山 勇子

司会	東京学芸大学助教授	大田 信良
3. パジェント小説の系譜 ヴァージニア・ウルフ『幕間』を経て A. S. バイアット <i>The Virgin in the Garden</i> にいたるまで	早稲田大学客員専任講師	吉野 亜矢子
4. T. S. Eliot “The Man Who Was King” と Kipling “The Man Who Would Be King” 「大洋横断的英米文学」の視座をさぐる	名古屋市立大学教授	成田 興史

第十室 (0号館6階603教室)

司会	一橋大学教授	金井 嘉彦
1. 「悪魔／セックスの哀しみ」『フィネガンズ・ウェイク』第2部第1章の楽園神話	東北学院大学専任講師	横内 一雄

司会	横浜市立大学準教授	片山 亜紀
2. 戦争加担者から平和主義者へ Vera Brittain の <i>The Dark Tide</i> (1923) を読む	慶應義塾大学大学院	上田 敦子
3. カリブの魔女と娘たち 逸脱者から救済者への表象変遷をたどって	お茶の水女子大学大学院	岩瀬 由佳

第十一室 (0号館6階602教室)

司会	福島大学助教授	坂本 恵
1. スコットランド演劇の現在 劇作家 Gregory Burke の作品を中心に	東京工業大学助教授	谷岡 健彦
2. 流れる「血」、変貌する主体 オーガスト・ウィルソンの『キング・ヘドリー2世』	大阪外国語大学大学院	天野 貴史

司会	京都大学教授	若島 正
3. ポストモダン時代のエンディング考 Muriel Spark の <i>The Finishing School</i>	三重大学非常勤講師	沢田 知香子
4. 記憶の手触りを再現する Kazuo Ishiguro の作品における記憶表象の変遷	信州大学特別講師	三村 尚央

第十二室 (0号館8階805教室)

司会	金城学院大学助教授	高野 祐二
1. On the Nature of Focus Feature Organization: Toward a Unified Account of the Additive <i>Mo</i> ‘Also’	慶応義塾大学助教授	星 浩司
2. On the Category and Interpretation of Partial Control Infinitives	大阪大学大学院	吉本 圭佑

司会	岐阜大学助教授	牧 秀樹
3. 文頭の付加詞に関する統語的一考察	筑波大学大学院大学院	谷川 晋一
4. have NP V-ing への構文論的アプローチ	埼玉学園大学助教授	現 影秀昭

第十三室〔特別研究発表〕 (0号館8階806教室)

司会	関西外国語大学教授	豊田 昌倫
※第3・4発表の時間帯にわたって行われます。		
3-4. New Speech Acts for Old, or How to Make a Drama out of a Speech Act: The Speech Act of Apology in the Film <i>A Fish Called Wanda</i>	ランカスター大学教授	Mick Short

日本英文学会第78回大会

研究発表要旨

SYMPOSIA 要旨

〈第一日〉

5月20日(土) 午後1時45分

研究発表

第一室

司会 京都大学教授 丹羽隆昭

ルネッサンスからバロックへ
ヘンリー・ジェイムズ後期三部作の創作順をめぐる謎を解く

学習院大学大学院 山口志のぶ

本発表では、人気の低迷を理由に長編執筆を断念したジェイムズが、十余年の歳月を経て発表した後期の三大長編 *The Wings of the Dove* (1902), *The Ambassadors* (1903), *The Golden Bowl* (1904) と、19世紀後半の美術界における様式の発展とを関連付け、ニューヨーク版に付記された序文の中で、『鳩の翼』よりも『使者たち』の創作が先である、と告白したジェイムズの真意に迫りたい。これほど完成された作品群がなぜ連続して発表されたのか、なぜ順番が違ってはいけなかったのか、この問題は等閑視されてきたと思われる。そこで、それぞれの小説に織り込まれた美術様式が創作順にルネッサンスからバロックへと辿っていることを検証するとともに、ジェイムズが追求した小説と視覚芸術の相補性に迫り、その謎の解明に挑む。そこから、形式や芸術性の欠如した英米小説の未来を憂えるジェイムズと後期三大長編の文学史における位置についても再考したい。

司会 お茶の水女子大学教授 竹村和子

A Wonder Book と神話愛好時代

京都大学助教授 水野真理

Hawthorne のギリシャ・ローマ神話物語集 *A Wonder-Book for Girls and Boys* (1852) および *Tanglewood Tales for Girls and Boys* (1853) の着想は 1838 年の Longfellow への書簡に記されている。Hawthorne の神話に対する執着はこのように永年にわたるものであったが、それは、ただ彼個人の趣味の問題ではなく、その背後に 19 世紀前半のアメリカ東部のメンタリティーが存在していたと考えられる。成人向けの Hawthorne 作品に示された彼のゴシック的姿勢については既に論じつくされた感があり、それはまた、ゴシック・リバイバルについても同様である。しかし、Hawthorne がゴシック、あるいはロマンティックと考えることを正確に把握するためには、対立概念である「古典的」を押さえておく必要がある。19 世紀前半におけるアメリカにおいて、ゴシック・リバイバルと平行して古典古代への回帰が一つの強迫観念であったことは、あまり注目されていない。これは、建築の分野においてはグリーク・リバイバル (Greek Revival) と呼ばれ、アメリカ各地にクラシカルな建造物をもたらしたものである。当時の美術界、そして文学界もまた、古典への情熱を見せていた。本発表は、そのようなアメリカの精神的背景に目を向けるとともに、その中で Hawthorne のギリシャ神話がどのような意義をもつのかを考察する試みである。*A Wonder Book*, *Tanglewood Tales* は児童書として Hawthorne 研究の中ではまじめに取り上げられることの少ない作品であるが、それらは、Hawthorne

の神話論、児童文学論、芸術様式論として読み直される必要がある。

司会 東京学芸大学助教授 若林麻希子

小説という学校

スーザン・ウォーナー『広い、広い世界』と American Lyceum

筑波大学大学院 杉本裕代

スーザン・ウォーナー Susan Warner の『広い、広い世界』 *The Wide, Wide World* (1850) は、主人公エレン・モンゴメリ Ellen Montgomery がニューイングランドの片田舎で、自然の有り様を観察・学習し成長していく過程を描く教育小説であると言える。自然風景は、エレンを教育するための舞台であり、同時に道具でもあった。このような「自然」に関する教育と教育法を広めるのに手を貸したのが、当時のアメリカ東部で隆盛を誇っていた museum movement や lyceum movement である。本発表では、『広い、広い世界』に提示されている自然観を、「自然」がいかに関係され、伝達され、受容されたかという時代背景にそって再読する。本作品での教育方法に注目し、その文化的背景として、19世紀初頭から始まった「自然」に関する教育、いわゆる「自然」の摂理や真理をわかりやすく眼前に、すなわち「自然のままに」提示するという構図が、本作品の中心的な構造として機能していることを確認したい。

司会 相愛大学教授 山下のぼる

『八月の光』 リーナ・グローヴを巡るフォークナーの人種意識

京都大学助教授 山内玲

フォークナーは、『八月の光』において、リーナ・グローヴを母なる女性としての側面を強調する形で描いている。彼女の母性を賞賛するにせよ、母性礼賛に通じる描写を男性中心的な価値観に基づく女性像として批判するにせよ、リーナについて論じるにあたり、その母性を抜きにして議論を展開することはほぼ不可能であろう。だが母性を中心とする従来の議論には盲点があるのではないか。その盲点とは、端的に言えば、ブアホワイトの娘リーナの人種意識である。

本発表は、彼女の人種意識に着目し、混血児の母ともなりうる白人女性へのフォークナーの複雑な態度を探ることを目的とする。作品とは関係のない場での彼の人種に関する発言はつとに知られているが、本発表で考察対象とするのは、作品構造に具現化される作者の人種意識である。そして、人種の軋轢と関わりのないように見える母なる女性として描かれ、評価されてきたリーナ像を再検討してみたい。

第二室

司会 青山学院大学教授 折島まさし

ジャック・ロンドンにおける「体験」の位相

東京大学大学院 高村峰生

この発表は「体験する私」と「書く私」という二つの相容れない作者のアイデンティティが、小説の語りの中にどのような葛藤をもたらすのかを、ジャック・ロンドンのクロンダイク地方に材をとった作品を精読しつつ検討する。前半では“In a Far Country”を読みながら語り手と登場人物に介在する関係の物語主題との関わりについて考える。二人の登場人物の極北の厳しい気候との戦いは、直線的なナラティブによって彼らを死に導こうとする超越的な語り手への抵抗として捉えることができるだろう。後半ではロンドンの作品内における循環する時間や出来事が直線的な語りのシステムとは異なる次元を構成することを確認した後、“In a Far Country”において作者の「体験」の他者として現れる先住民がいかにして「書く側」に属する「文明」を襲うかを考察する。全体として本発表は、複数的な作者性の小説への表出についての考察となるだろう。

司会 国士舘大学教授 まつもと のぼる

Negotiating Black Identity in Ralph Ellison's *Invisible Man* and Percival Everett's *Erasur*

慶應義塾大学他非常勤講師 Raphaël Lambert

Although written half a century apart, Ralph Ellison's *Invisible Man* (1952) and Percival Everett's *Erasur* (2001) address the same issues of black identity and invisibility. Both Ellison's nameless narrator and Everett's protagonist, Thelonious 'Monk' Ellison, feel alienated by a society that will not see beyond the color of their skin. Reduced to their racial selves, they are in effect “invisible” or “erased.” The first part of this reflection focuses on the psychological impact of racial labeling in both postwar and early Twenty-first Century America. The second part analyzes the strategies each character devises to confront racism and alter his fate. Ultimately, this reflection sheds light not only on the evolution of racial discrimination but also African Americans' self-perception over the past five decades in the United States.

司会 学習院大学教授 かみ おか のぶ お

二つの海戦と「決闘美」

Men at War の “Tsushima” と *The Old Man and the Sea*

中京大学非常勤講師 やなぎ さわ ひで お

1941年の Pearl Harbor の翌年出版される戦争物語選集、*Men at War* (1942) の序文で、ヘミングウェイは日本海海戦を題材にした Frank Thiess による “Tsushima” という海戦記を高評価する。真珠湾珠

湾攻撃直後の当時の緊迫した日米関係下、1905年にアジアの小国日本が西洋の大国ロシアに大勝利を収めた物語を取って選集に加えたこと、そして彼の賞賛が西洋との比較を通して日本の精神風土にまで及んでいる点は注目に値する。このことは、1941年から日本に関連する書物が急増する事実と併せて考えると、この世界的大作家が日本から何らかの影響を受けた可能性に迫ることができるだろう。

本論では、ヘミングウェイが戦争や闘牛に期待する「決闘美」という概念を用いて、共に「海戦」という側面を持つ“Tsushima”と *The Old Man and the Sea* の類似性を指摘し、原型から大いなる変貌を遂げたサンチャゴ老人創造との関わりについて述べたい。

20世紀のアーキテクチュア

Tours of the Black Clock のメタフィクション性と時空間の表象

大阪外国語大学大学院 岡本太助

世紀転換期アメリカにおける歴史への関心の高まりを、表象の不可能性／不可避性という二重性において捉え、さらに歴史と物語の関係性についての議論を踏まえたうえで、Steve Erickson の第三小説 *Tours of the Black Clock* (1989) における歴史表象の戦略を分析する。具体的にはテキスト内の複数の主体のあいだの交渉（テキストの「作者」の地位を巡る覇権争い）のための場を生み出すメタフィクションの手法や、空間的メタファーや語彙による時間の描写が浮かび上がらせる、過去の記憶をとどめるものとしての「場所」の断片化・流動化を検証する。その過程で、歴史記述がはらむイデオロギーやポリティクスを小説として物語化することの、ポストモダンアメリカ社会における意義や効果を論じつつ、さらには作品と伝統的「アメリカらしさ」の関係において、現代アメリカにおけるアイデンティティー構築の問題を探る。

第三室

司会 茨城大学助教授 岡崎まさお

文学と言語学の接点 English Conundrums の意味構築を中心に

京都大学大学院 安原和也

従来の言語学分野は、Crystal (1998:1) も “Ludic language has traditionally been a badly neglected subject of linguistic enquiry—at best treated as a topic of marginal interest, at worst never mentioned at all.” と述べるように、ことば遊び現象を言語学の問題として積極的に扱うことがなかった。これに対し、本発表では、文学領域と言語学領域の接点を開拓する1つの試みとして、認知言語学の観点からことば遊び現象をどう分析できるかを1つの事例研究を通して論じる。具体的には、「なぞなぞ」の一種である English Conundrums (音声的類似性に着目した謎) を分析対象として、その背後に潜む意味構築の実態を、主として Fauconnier & Turner (1994, 1998, 2002) で提唱された概念ブレンディング理論の観点から分析する。結論として、ことば遊びの背後には概念ブレンディングという認知原理が働き、ことば遊びの創造性を開花させている点を明らかにする。これにより、概念ブレンディング理論は文学と言語学の現象を同一の原理で探求できる優れた理論的基盤の1つであることを、ことば遊び

の観点からも裏付ける。

3 語複合語のリズムと修飾部という概念

青山学院大学教授 中澤かずお

本発表では、従来あまり焦点の当てられて来なかった、3語(以上)からなる複合語の名詞の強勢に関する諸事実を観察し、これらを正しく導くには様々な規則や概念が必要であり、中でも、特に、「転換(Conversion)」と「英語のリズム規則」と「修飾部(Modifier)」という概念が重要であることを論じる。

3語複合語を論じる前に、まず、2語複合語の正しい強勢型を派生するためには転換とリズム規則が必要であることを指摘する。そして、リズム規則は、修飾部に適用されること、かつ、その修飾部は形容詞でも名詞でもあり得ることを、実例を以て示す。そして、これらの規則や概念を使うと、3語複合語の強勢型が正しく導かれることを示す。

最後に、修飾部という概念は英文法固有ではなく、文法理論に属す可能性を指摘する。

司会 中央大学教授 新井洋一

アイルランド英語の形態・統語法的諸特徴

John B. Keane (1928-2002) の言語をもとに

京都大学大学院 嶋田たまみ

アイルランド英語(Hiberno-English)は、アイルランド語と英語の長期にわたる言語接触により形成され、現在は他の主要な英語変種との闘ぎあいのなかで急速に変化しつつある言語である。John B. Keane の言語にはアイルランド英語西部方言の文法の現在のな諸相をみることができる。おもに1960～70年代のKeane作品(劇作および書簡体小説)の文例をとおして、主要な形態・統語法的特徴の(a)語順転倒文、(b) *'tis-it is...* 構文、(c) *do be* 形式、(d) *be after V-ing* NP、(e) 倚辞化形式について概観する。文例を文脈のなかで読み解き、データ分析する過程において、例えば、当該言語の *'tis-it is...* 構文が一見形式的に類似した分裂文ではなく、モダリティを表わす文頭副詞とそれが導く構成素から成ること、習慣相を表わす *do be* 形式には *the way* 節と関係節において主語/先行詞の属性を表す用法があることを明らかにする。さらに2003年以降続けているKeaneの町Listowelにおける自身のフィールド調査を踏まえ、文法変化を視野に入れた考察を試みる。

SYMPOSIUM

第一部門

英文学と〈文明化〉の変遷

司会・講師	専修大学教授	末廣幹
講師	大同工業大学専任講師	小西章典
講師	東北大学講師	岩田美喜
講師	愛知教育大学助教授	久野陽一

末廣幹

初期近代イギリスを対象とする近年の文化研究の目立った傾向のひとつとして、Anna Bryson の *From Courtesy to Civility* (1998) のように“civility”をキーワードとした研究が挙げられる。こうした研究は、もちろんノルベルト・エリアスの『文明化の過程』(初版出版 1939 年)を再評価する試みと言える。本シンポジウムは、近年の“civility”研究の成果を踏まえながら、この問題意識を、初期近代におけるブリテン帝国のナショナル・アイデンティティの成立を問う問題系と接続することで、〈文明化〉のベクトルが、〈帝国〉をめぐる多様な力関係と連動しながら機能していたことを具体的に検証する。従来の“civility”研究は、ヨーロッパ内部の〈文明化〉にもっぱら焦点をしばりがちであったことが批判されているが、本シンポジウムでは、〈帝国〉の内部ばかりでなく、その外部、とくに非ヨーロッパ世界との関係にも注意を向けることで、新たな“civility”研究の地平を開きたいと考えている。

ならず者たちの礼儀 初期近代イギリス演劇と〈文明化〉の裏側

小西章典

〈文明化〉や〈礼儀〉についての研究は、これまで、上流社会という限られた領域を暗黙の前提にしてきた。当然、その視野に、法規制の対象となる野蛮な〈ならず者たち〉が入ることはない。だが、演劇のなかでは、彼らは、独自の〈礼儀〉を形成する者たちとして表象されているし、さらに、この野蛮なマイノリティー集団が示す〈礼儀〉が、社会全般の〈礼儀〉を照らし出すことになる。Robin Hood 的な義賊のモチーフや、チャールズ朝喜劇における“beggars’ commonwealth”というモチーフなどは、そのあらわれと言えるだろう。そこで、本発表では、〈ならず者たち〉が示す〈礼儀〉に注目する。具体的には、William Shakespeare、Thomas Dekker、Richard Brome などの作品に登場する〈ならず者たち〉の隠語や行動様式をとりあげて、野蛮のなかの〈文明〉を考察する。初期近代イギリスにおける〈文明化〉の変遷に、裏側から焦点をあてていきたい。

帝国の〈内部〉と〈外部〉をつなぐネイボップ

末廣幹

初期近代イギリスにおける〈文明化〉の過程を再考する上で注目されているのは、ブリテン帝国のナショナル・アイデンティティの確立と“civility”との関連であり、とりわけ、帝国の内部の〈他者〉であるウェールズ、スコットランドとアイルランドの人々や外部の〈他者〉である植民地のネ

イティヴと帝国との対立・交渉のプロセスの意味が考察されている。しかし、この枠組みでは、帝国の内部と外部とを行き交った人々の存在が等閑視されてしまっている。このような文脈を踏まえて、ここでは、当時の演劇に見られるインド帰りの成り金、すなわちネイボップ (nabob) の表象のパターンに具体的に注目し、その表象を通じて“civility”の言説がどのように規定されているかを考察したい。ネイボップと言えば、Samuel Foote の喜劇 *The Nabob* (1772) がもっとも有名だが、John Crown の *Sir Courty Nice* (1685) や Nicholas Rowe の *The Biter* (1705) にまで遡って議論を始めたい。

ロンドンのステージ・アイリッシュマンと〈標準英語〉教育

岩田美喜

英国演劇のいわゆる〈ステージ・アイリッシュマン〉とは、自慢屋で臆病といった特徴に加え、訛りがひどく破格の英語を喋る。彼らは、操る言語によって明確に〈文明化〉された世界から疎外されているのだ。こうした中、Thomas Sheridan, *The Brave Irishman* (1743) の主人公は、言葉は粗野だが勇気と寛大さを持った人物として描かれ、ロンドンで求婚に成功する。アイルランド人を一種の「高貴な野人」とする態度は、独立運動時に好まれたロマン主義的アイルランド人表象の先触れのようなのである。しかし彼は、ダブリンからロンドンへ拠点を移した後は *British Education* (1756) を上梓し、英語という言語を洗練させ〈標準英語〉を学ぶことが文明化への道だと主張しているのだ。本発表では、シェリダンやその息子 R. B. Sheridan を含め、18 世紀のロンドンで活動していたアイルランド人が、スタンダードとしての英語とどのような関係にあったのかを考察したい。

感受性と文明の境界

久野陽一

Paul Langford のいう“A Polite and Commercial People”の時代であったイギリスの 18 世紀において〈文明化〉の過程は、たとえば J. G. A. Pocock によると、政治的意味合いの強い“virtue”から社会的な“manners”への移行として理解される。商業・余暇・教養・労働の分割と多様化が結合してもたらされる社会的存在として人格が形成されることによって、「作法」の実践として「徳」が再定義されるのだ。この過程は文学作品において「洗練」された感受性として表象される。一方、植民地主義の拡大に対して、一部の感受性の文学は奴隷貿易廃止運動と結びつく社会的な「徳」を唱えた。それは結果的に、感受性が西洋文明の境界を問い直すことにつながる。そこでここでは主に、ヨーロッパ系の白人と感受性を共有しようとしている点で、こうした境界を体現するアフリカ系作家 Ignatius Sancho と Olaudah Equiano を通して、感受性を媒介とした 18 世紀後半における文明の一面を明らかにしたい。

第二部門

詩人の詩人論

司会・講師	神戸女学院大学教授	やま だ ゆ み こ 山 田 由 美 子
講師	放送大学助教授	おお い し か ず よ し 大 石 和 欣
講師	明星大学教授	かさ はら より みち 笠 原 順 路
講師	同志社大学教授	なか い あきら 中 井 晨

山田由美子

「最高の順序に並べられた最高の言葉」が詩であるとするなら、詩人を最もよく知るのとは詩人ということになるだろう。「文学表現の極致」である詩のなかに、「最高の言葉」の作り手としての詩人がどのように詠み込まれているか——それを探るのが本セッションの目的である。

構想は、「引喩」の可能性を追求することで批評における「読み」を復権させた Christopher Ricks の *Allusion to the Poets* (2002) に負う。今回試みるのは、Ricks の提唱した手法の発展的応用であり、詩人と作品の不可分性を強化し、文体と創作理念、ジェンダーと政治、詩人の自画像、文明批評など、多角的な視野から、詠み手の詩人と詠み込まれた詩人の虚像と実像を解明していく。

快楽と徳の和解 Milton の Jonson 像

山田由美子

初期の Milton の詩に反映された Jonson 像から、両詩人の創作理念を見直す。Jonson と Milton は、古典の素養と公的詩人としての高邁な理想を共有しながら、前者は Horace 的快楽主義、後者は Plato と聖書に基づく禁欲主義を標榜しており、影響関係が取り上げられることは稀である。文体を比較しても、Jonson の口語的簡明体と *Paradise Lost* に代表される荘重体は相容れそうにない。しかし、初期の Milton の抒情詩には、王党派詩人と見紛うほど Jonson 風の特徴が色濃く見受けられる。信仰を制作の基盤としていた Milton が、反ピューリタニズムの旗手でもあった Jonson の快楽主義を、自己の信仰とどのように融和させたのか。作曲家 Henry Lawes の文体論を通してその原因を究明する。時間的余裕があれば、Tom Lockwood が最近指摘した、ロマン派の詩人に対する Jonson の影響とも関連づけてみたい。

「引喩」の政治性 ロマン主義時代の女性詩人による男性詩人批評

大石和欣

「引喩」(allusions) は、男性詩人同士の作品内だけではなく、ロマン主義時代の女性詩人の作品内にも潜在する。しかもジェンダーと政治の問題を包摂しながら。社会的にも文学史的にも確立した詩的言語を所有していない彼女たちにとって、同時代の男性詩人および彼らの作品への「引喩」は、単なる修辭的な問題ではなく、変動する歴史的状況への言及を媒介することによってなされていた。それは自らのスタンスを明確にするとともに、自分たちの言語を公共圏の枠内で確立しようという試みだったといえる。本稿では、Wordsworth, Coleridge, Southey などのロマン主義男性詩人への批評的「引喩」を、同時代の女性詩人による歴史的「引喩」の中に読み取る。女性詩人による詩的言語

確立のための「引喩」は、保守的な批評家による嘲笑を招くことになり、結果的にますます彼女たちの言語を不安定なものにしていく。そこには「影響の不安」というよりも「存在の不安」が看取できよう。

“Egotistical Vocative” あるいは、呼び出されたロマン主義的理想の自画像

笠原順路

(1) Wordsworth, (2) Shelley, (3) Keats, (4) Byron の代表的な作品のなかに現われる(広義の)詩人の自画像と解される詩行を見る。そしてそれらがそれぞれの詩人の詩論の特徴を反映しながらも、全体として、共通するロマン主義的特質を表わしていることを説く。

扱う作品は、(1) “There was a boy”, (2) “Ode to the West Wind”, (3) “Ode on a Grecian Urn”, (4) “The Colosseum episode” from the Canto IV of Childe Harold’s Pilgrimage.

これらの詩行で、詩人が行なう「呼びかける」行為とは、つまるところ己を呼び出だす行為となる——これを要するに “Egotistical Vocative”。

鮎川信夫が T・S・エリオットから学んだこと

中井 晨

戦後の鮎川を決定したエリオットの詩と文明批評を、彼の長詩「アメリカ」(1947年5月30日付初稿)を例にして検討してみたい。

エリオットは『荒地』に「此等の断片でもつて私の廢墟を支へてゐる」と記した。さまざまな詩行や評論の断片によって作品を構成することが鮎川の「アメリカ」の方法であった。ここに肉化されたエリオットの断片は、戦前の詩誌『新領土』に掲載された翻訳から採られている。鮎川はかつて翻訳で読んだエリオットを手練りよせながら、敗戦によって崩壊した精神の再構築を試みるのである。テキストは彼のなかに突き刺さり、記憶として沈着していた。それは、翻訳の有効性の論議以前の、生の体験であった。その体験が自らのテキストに甦る。アルージュの考察を弄ぶことは許されない。エリオットを自らのテキストに呼びこむ鮎川の作業は、断じて、知的遊戯ではなかったからである。

第三部門

19世紀イギリス小説に潜む〈食〉の諸相

司会	奈良女子大学教授	よこ 横	やま 山	しげ 茂	お 雄
講師	京都橘大学教授 (歴史学)	みなみ 南		なお 直	と 人
講師	中京大学教授	いわ 岩	た 田	より 託	こ 子
講師	埼玉大学助教授	おお 大	く 久	ほ 保	ゆずる 譲
講師	明治大学講師	こ 小	みや 宮	あや 彩	か 加

横山茂雄

「文学では食べられない」とは一面の真理を衝くものだろうし、「文学は食べられない」はほぼまちがいでなく真理といえよう。ひるがえって、文学、とりわけ、人生の俗なる部分を描くジャンルとして勃興、発展した小説にあっては、当然ながら食生活の諸相が、程度の差はあれ、書きこまれている。

飲食という行為が、決して独立して存在するものでなく、政治、経済、宗教、思想などが交錯する複雑な場であることは言を俟たないだろう。様々な面で大きな変革の時期であった19世紀のイギリス。この時代の小説において描かれた食生活に、その点は明瞭に刻印されている。司会者としては、飲食をてがかりとして、小説の読み、解釈を豊かにするような切り口を、歴史学の専門家も含めた講師の方々から引き出すことができればと願っている。

ヨーロッパ近代社会と食

南直人

歴史学の視点から、19世紀ヨーロッパの食にかかわる諸問題について検討したい。

17・18世紀には新しい食品がヨーロッパにおいて普及したが、19世紀には、工業化と都市化の中で食の変化がいつそう進展し、それが民衆レベルの食生活にまで及んでくる。食品生産加工技術の革新による新たな食品工業や都市における食品流通システムの成立は、食料供給のための条件を大きく変えた。それとともに、食品偽装などの新たな問題も出現し、食品流通や衛生にかかわる法規制、公権力による監視体制が整備されていくことになる。他方、この時期には栄養学が成立し、食にかかわる新たなパラダイムが提示される。栄養学の言説は、一方では近代国民国家形成を食の分野から支える役割を果たすが、他方、こうした一連の傾向に抵抗するような「反近代」の言説——ヴェジタリアニズムや自然療法など——も生まれてくる。まさに食の世界の中に19世紀が反映されているのである。

19世紀撰酒／節酒と *Scenes of Clerical Life*

岩田託子

〈食〉のシンポジウムに、まげて〈飲〉酒を割り込ませていただいたのは、発表者が禁酒運動における娯楽的要素、特に幻灯機利用を調査中であり、当時の撰酒／節酒状況の把握に目下努めているからである。この見地から、George Eliot の小説第一作 *Scenes of Clerical Life* (1858) を読み解いていきたい。本書に収められた3作品の執筆は1856年に始められた。舞台は25年前に設定されている

が、1831年とすると、ロンドンで British and Foreign Temperance Society が発足した年にあたる。地方生活での日常的な〈飲む〉状態を描きながら、末尾の "Janet's Repentance" は女主人公の断酒による人生リセットで終わる。そのきっかけとなった福音派の牧師の存在は、Eliot が福音主義と決別していたことと照らしあわせると単純ではなく、少々踏み込んで考える必要があるだろう。1830年頃の英国における、飲むこと／飲み過ぎること／飲むのをやめることの文化的意義を、この小説に探っていきたいと思う。

危険な食事

大久保譲

19世紀中葉のイギリスにおける「安全な食事」についての議論と、同時代の小説との関係について考察する。1850年暮れから翌年にかけて、*Household Words* にいくつかの小さな記事が載った。“Death in the Teapot” や “Death in the Bread-Basket” といった挑発的なタイトルが付されたそれらの記事では、食品添加物が日常的な食の安全を脅かしているとの告発がなされている。同誌には引き続き、テムズ川の水を飲用とする危険を論じたエッセイも掲載され、他の様々なメディア——専門的な *Lancet* の論文から *Punch* のカリカチュアまで——と併せ読むと、飲食物の安全性に関する言説のネットワークの存在が見えてくる。それは「家庭」あるいは「国家」という身体を外部の危険から守るという言説とも連動しているだろう。こうした文脈の中に置いて、*Household Words* にも寄稿していた Charles Reade や Wilkie Collins のセンセーション・ノベルを再検討してみたい。

ヴィクトリア朝小説の肉食者と菜食者

小宮彩加

肉食中心の英国においてヴェジタリアニズムが一般的なものになったのは、ヴィクトリア朝時代になってのことである。特にヴィクトリア朝後期には、ヴェジタリアンの増加が著しく、1848年設立のヴェジタリアン協会の会員数もピークに達した。このような時代の文学では肉食・菜食の区別はどう描かれているのだろうか。

本発表では、H.G.Wells の作品を中心に、ヴィクトリア朝後期の小説における肉食・菜食を考える。*The Time Machine* (1895) や *The Island of Dr Moreau* (1896) では、登場人物は明らかに肉食・菜食の区別を与えられている。*Vegetarian Messenger* をはじめとする当時のヴェジタリアニズム関連の文献を用いながら、ヴィクトリア朝時代における肉食者・菜食者のイメージを明らかにした上で、それらの作品を考察したい。

第四部門

「大戦間」の文化研究のために 共同体、ファシズム、精神分析

司会・講師	首都大学東京教授	遠藤不比人
講師	日本女子大学教授	川端康雄
講師	静岡県立大学短期大学部助教授	中山徹
講師	京都ノートルダム女子大学専任講師	河野真太郎

遠藤不比人

文学史は歴史を抑圧する。「ルネサンス」が「初期近代」、「世紀末」が「世紀転換期」へとその名を変え、より厳密に歴史的な文化研究が実践されている一方、「モダニズム」という旧来の文学史的用語が特権化されている 20 世紀イギリス文学・文化研究。これに対する批評的介入の方法は？これが、本シンポジウムの問題提起である。一次大戦後(再)顕在化した階級闘争、レッセ・フェールの破綻、英帝国の解体、ファシズム的欲望の組織化。この一連の「危機」を射程に入れた研究は、必然的に、狭義の文学(史)的用語である「モダニズム」よりはむしろ、「大戦間」という広義の文化研究を可能にする語を選択する。その際、共同体、ファシズム、精神分析という相互に密接に関連したテーマが、同様に必然的に視界に浮上してくる。戦略的に一度「モダニズム」という観念を括弧に括ることにより、逆に、この審美的な言説装置が「大戦間」において帯びた歴史性を語る有効な視野を獲得することができるはずである。

「欲動」という名の Klein 的主題と「大戦間」研究

遠藤不比人

『快感原則の彼岸』(1920)の Freud は、心的装置の制御不能な(反復強迫的)過熱を「死の欲動」と呼んだが、このメタ心理学を愚直なまでに実践した Melanie Klein は「ブルームズベリー」を通じて、大戦後のイギリスで熱烈に受容された。なぜ、Klein であったのか？レッセ・フェールの暴走に絶句した M. Keynes の経済学、労働者に対する中産階級のパラノイア的妄想の過剰に戦慄した L. Woolf の政治学、「文明」を内破しかねない根源的な攻撃性を昇華することに腐心した R. Fry の美学——「大戦間」とは臨床的な次元を超えて「死の欲動」(の制御)に取り憑かれた時代でもあった。この視点から「大戦間」を再歴史化するとき、大戦後イギリスの精神分析を一挙に席卷した Klein 的理論の検討は必要不可欠である。「欲動」を巡る Klein(派)の言説を吟味することで、「大戦間」において精神分析が帯びた歴史的意義を明らかにしたい。しかし、なぜ、Klein であったのか？

Inside the Whale (1940) と民衆文化のイコノロジー

川端康雄

1939 年の暮れに脱稿した George Orwell のエッセイ “*Inside the Whale*” は、Henry Miller の評価を主眼としながら、同時に戦間期の英文学の総括を行っている。非政治的で「目的」意識をもたぬ (Joyce, Eliot らに代表される) 1920 年代作家たちと、「正統」左翼のイデオロギーによる「目的」意識を過剰に帯びた (Auden 一派に代表される) 30 年代作家たちという図式は、その後の文学史的ナラティブの祖型になったといえるが、開戦直後の危機の時代に彼がこのエッセイを “Charles Dickens,” “Boys’

Weeklies” と組み合わせた trilogy として刊行した意義については、従来それほど掘り下げられてこなかったように思う。とりわけ “Boys’ Weeklies” は、文学批評の階層秩序に抗って「低俗」な文化事象を扱った彼の一連の民衆文化論の嚆矢となるエッセイとして重要である。「民衆文化の iconologist」としての Orwell の顔に注目しつつ、*Inside the Whale* を読み直してみたい。

Wyndham Lewis と BUF

中山徹

W. Lewis は *Hitler* (1931) において、資本主義と共産主義(あるいは、借入資本と階級闘争)を超克するための原理を、ヒトラー主義の根底にある race-sympathy に見出している。そのとき彼が価値基準として導入するのは、vorticism 的な美学と、反「ロマン主義」としての「古典主義」である。その意味で、10 年代、20 年代の Lewis の美学と 30 年代の彼の政治学は、原理的に通底している。発表では、このことを確認したうえで、さらに、Lewis の「ファシスト・モダニズム」と O. Mosley 率いる BUF との美学_政治学的な類似性を指摘したい。具体的にいえば、後者にみられるコーポラティズム的な自給自足経済政策が、前者において集中/拡散の二項対立に基づいて美学化されていること、前者における hard / soft という美学的枠組みが、後者における国家社会主義論や農本主義的国家再生論に取り込まれていること、などを問題にしたい。

大戦間の「文化研究」と自由主義イングランドの奇怪な死

河野真太郎

私は、本シンポジウムのタイトルを少しずらして、「大戦間の『文化研究』」と読む。大戦間という時代が、英文学の本格的制度化と、その一方で映画やラジオといった新たな「大衆メディア」勃興の時代であったことを考えると、1930 年前後の「文化論」ブーム(固有名を挙げるなら、T. S. Eliot, E. R. & Q. D. Leavis, J. C. Powys...) をどうとらえるかが、この時代を読む上で決定的に重要であると思われる。

この文化論ブームには、勃興する大衆文化に対する階級文化闘争の側面があるのは確かだが、Jed Esty は *A Shrinking Island* (2004) において、これを帝国とそれを支える自由(放任)主義の破綻と、小英国主義・福祉国家主義への転向という大きな歴史的視点に置き直し、Englishness 研究という形で盛んな英国ナショナリズム研究に新たな視座を提供した。本発表では、30 年前後の文化論を精査することで、Esty のテーゼに一定の修正を加えるを試み、かつ現代において戦間期の「文化研究」を問い直すことの歴史的意義を考察したい。

第五部門

中世ロマンス 文学的研究と語学的研究の壁を越えて

司会	摂南大学教授	いま い みつ のり 今井光規
講師	広島大学教授 (フランス文学)	はらの のぼる 原野昇
講師	大阪外国語大学助教授	たじり まさ じ 田尻雅士
講師	筑波大学助教授	やまぐち えり こ 山口恵里子

今井光規

ヨーロッパにおける中世ロマンスの特質を多様な視点から探る。例えば、物語の構造や展開、特徴的な表現などを個々の作品について論じることも可能であるが、作品間の類似性や特異性を検討することもできる。そのような問題を共時的に扱うだけでなく、口承の伝統、ロマンスの系譜、隣接ジャンルとの関係、古典修辞学の影響などの問題を含め、通時的に論じることもできる。口承の物語から印刷本にいたる過程では、写本と写字生の物語の伝播に係る本質的な問題がある。また、各種の図像や視覚的資料の分析を通じて、中世における身体イメージが如何にロマンスの言語に組み入れられ作品を生み出しているかを人類学的視点から考察することもできる。扱う作品は英語で書かれたものに限らず、フランス語などの言語によるものも対象となる。

従来、中世ロマンスは語学的側面と文学的側面に切り離されて論じられがちであった。このシンポジウムでは、そのような切り分けを越えて様々な視点を融合させ、できるかぎり自由かつ総合的なアプローチを試みたい。

文学ジャンルと言語 修辞法・詩法・語彙

原野昇

ポール・Zumthor (Paul Zumthor) は、その著『ロマン期 (11-13 世紀) の詩の言語と詩法』の中で、抒情詩に関して、あるモチーフに対応して特定の音調をかもし出すのに用いられている言語的修辞的手法をオルガンの鍵盤にたとえた。たとえば春のテーマの中の「小鳥の歌」のモチーフに対して、それを彩る一連の語彙が一つの鍵盤をなしているとした。このことは抒情詩に限らず他のジャンルにも応用できよう。『狐物語』第7枝篇には、キリスト教関係の語彙がふんだんに出てくるが、内容は主人公の狐のルナールが修道士や司祭をくそみそにけなしているものであり、まさにさかさまの世界である。

古典的修辞法、中世の詩法、およびそのパロディ的应用と、武勲詩・抒情詩から物語(ロマン)、さらに『狐物語』・ファブリオへと移る、口承から音読・黙読への文学の受容形態とジャンルと言語の問題をみてみたい。

ロマンス・写本・scribal editing MS Ashmole 61 の場合

田尻雅士

Bodleian Library, Oxford 所蔵の MS Ashmole 61 に収められた二つのロマンス、*Sir Cleges* と *Sir Orfeo* はいずれも夫婦愛が一つの主題になっている。また、この Ashmole 写本の写字生 Rate は A.J. Bliss や Lynne S. Blanchfield らによって 'an idiosyncratic scribe' と称されている個性的な人物であり、exemplars

に対し少なからぬ scribal editing を施したと推測されている。*Sir Cleges* は他の一写本、*Sir Orfeo* は二写本にも収められているが、夫婦愛やその他の主題の描き方に Ashmole 写本といかなる相違が見られるのか着目してみたい。また、できれば Ashmole 写本所収の他のロマンスにも言及する予定である。片言隻句に現れる微細な言語的ヴァリエーションと見做されがちなものの中にも、作品の主題に影響を与えかねない変異が潜んでいる可能性がある。この写本のケースは一例に過ぎないが、中世英国ロマンスが、時として写字生の嗜好により改変された過程を知る一助となるかと思う。

中世ロマンスと身体形象化 分断・エクスタシー・復活

山口恵里子

近年、中世における身体イメージの研究がすすんでいる。本発表では、身体の分断化、異種混淆(異形)、エクスタシー、そして復活という観点から、中世ロマンスに現れる身体イメージを分析し、「形象(化)」と「非形象」のあいだの動揺を探る。言語化された世界には、身体的なるものや「形」なきものにたいする恐れ(畏れ)の感覚が潜在している。そうして潜在しているものを、ロマンスがいかに言葉として現働化したのか、またロマンスがそうした形象としての言葉を産出するいかなる物語の場となっていたのかを追跡し、ロマンスの語りに生動するもの、語りのなかに現れる身体的なるものについて考察する。

分析の過程では、(身体)境界と異なるものへの執着ないしは忌避にも注目する。また、人類学的視点から中世の身体をめぐる文化的・宗教的状況を把握するとともに、細密画や衣装などの図像・視覚的資料、身ぶりに関する作法書なども用いる。さらに、中世ロマンスに表された身体イメージが時を隔てた 19 世紀英国の中世主義の文学・芸術とどのように遭遇したのかについてもふれたいとおもう。

第六部門

言語の研究・教育と脳科学との接点

司会・講師	東北大学助教授	こ いずみ まさ とし 小泉政利
講師	宮城学院女子大学教授	ゆ さ のり あき 遊佐典昭
講師	JST・東京大学研究員 (発達脳科学)	ほ まえ ふみ たか 保前文高
講師(コメンテータ)	広島大学助教授	さか い ひろむ 酒井弘

小泉政利

生きた人間の脳の構造と働きを調べる脳機能イメージング技術が実用化されたおかげで、この 10 年ほどで言語を司る脳内神経基盤に関する研究が飛躍的に進み、その成果を教育に応用しようとする試みも盛んになってきた。しかし、最新の脳機能イメージング技術の有効性が言語の記述的・理論的研究や言語教育に従事している研究者・教育者に広く認識されているとはいえない。

そこで、本シンポジウムでは、脳機能イメージングをツールとして考えた場合に、言語研究にどのように生かせるのか、また母語や外国語の教育にどのように貢献できる可能性があるのかについて考察する。まず 3 人の講師がそれぞれ、成人の言語能力(小泉)、第一言語習得(保前)、第二言語習

得(遊佐)の領域について発表を行った後、4人目の講師(酒井)がそれらを有機的に関連付けるコメントを行う。最後に聴衆の方々と一緒に「言語認知脳科学」の今後の展望について議論する。

言語認知脳科学への招待

小泉政利

心の計算内容や計算手順を研究する認知科学と、心を生み出す脳の物理的(化学的・電気的)性質を研究する脳科学とが融合(をめぐ)して生まれたのが、**認知脳科学**である。本発表では、初めに、認知脳科学の歴史的背景、脳の構造と働き、および脳機能計測技術について、特に言語(学)との関係に焦点を当てて概観する。

次に、私たち東北大学の研究グループが成人を対象に機能的磁気共鳴画像法(fMRI)や事象関連電位(ERP)など種々の脳機能計測技術を用いて行った「認知脳科学的」言語研究の事例を紹介し、脳機能計測技術が言語の研究や教育にどのように貢献できるかについて考察する。

さらに時間が許せば、誰にとっても分かりやすい言語表現、すなわち「**言葉遣いのユニバーサルデザイン**」の研究の必要性や、感性や感情に関する認知脳科学の研究手法を文学の研究に援用する可能性についても私見を述べたい。

脳科学の観点から探る乳児の言語発達

保前文高

乳児を対象とした行動研究により、発話を始める時期よりもかなり早い段階から、音声情報の処理をする能力は発達を始めていることが明らかになってきた。例えば、生後数日の新生児が音声の韻律情報をもとに言語間の聞き分けをすることや、一歳になる前には、母国語で頻繁に用いられるアクセントのパターンや音の連なりがわかるようになることが報告されている。一方で、乳児期は脳が構造面でも機能面でも飛躍的に成熟を遂げていく時期であり、行動に表れる発達をその基盤となる脳の機能的な発達という観点から捉えることは、言語発達の初期段階を包括的に調べる上で非常に有効である。近年、乳児における脳の活動を外部から安全に計測する技術が向上し、音声知覚に伴う脳活動の変化を調べることができるようになってきた。乳児期初期に特に重要と考えられる韻律情報の知覚に焦点をあて、発達脳科学の手法を用いてどのように言語発達に迫れるかを考えてみたい。

第二言語獲得研究から見た脳科学

遊佐典昭

第二言語獲得の脳研究は、バイリンガルの失語症研究から始まったが、fMRI(機能的磁気共鳴映像装置)、脳磁図、光トポグラフィーといった脳イメージング装置の発達により関連を深めている。脳が第二言語知識を生み出すメカニズムが分からない「錬金術時代」である現状では、脳研究は、言語課題に対する脳活動を時空間の観点から定量的に測定することで、脳機能を探っている。しかし、脳科学は求めているものを本当に見ているかどうかさえ分からない。このような状況では、脳科学などに関心を持たずに言語理論だけに関心を持つべきだという主張も理解できる。しかし、本発表は、このような状況のもと、第二言語獲得研究がどのように脳科学とかかわりえるのかを議論したい。具体的には、fMRIを用いた日本人の英語獲得過程の研究を紹介する予定である。

〈第二日〉

5月21日(日) 午前10時

研究発表

第四室

司会 帝塚山学院大学名誉教授 いま今 にし西 まさ雅 あき章

Troilus and Cressida における知覚理論

学習院大学大学院 まつ松 おか岡 ひろ浩 し史

1599年に英訳版が出版された Andreas Laurentius の著作 *A Discourse of The Preservation of The Sight* は、当時流布していた体液理論の著作の中でも、特に視覚を人間の感覚の中で最も高貴な器官であるとし、目の構造や知覚のシステムについて具体的に論じた画期的な知覚理論書である。この書物を Shakespeare が実際に読んでいたかどうかは想像の域を出ないとしても、これ以降の Shakespeare の作品——特に4大悲劇に顕著であるが——においてメランコリーの人物が夥しく登場していることは注目に値する。1601年に書かれた可能性の高い *Troilus and Cressida* においては、知覚理論に関する言及が多く見られ、Shakespeare が直接的にせよ間接的にせよ知覚、特に視覚に関する情報の伝達システムに強い関心を持っていたことは疑いを入れない。本発表では、*Troilus and Cressida* のテキストに当時の知覚理論がどのように機能しているかを検証し、この作品中で最も重要な主題である価値論との関連を検討する。

『トロイラスとクレシダ』の終幕の不安

甲冑とヘクターの死

関西大学非常勤講師 わか若 さ狭 とも智 こ子

シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』5幕6場において、ヘクターがある無名のギリシャ兵を殺し、その豪華な甲冑を剥ぎ取るという、小さなエピソードがある。これには多様な批評が試みられてきた。ここで彼が示す、甲冑という「モノ」に対する欲望——美的価値に対する嗜欲ないしはフェティッシュな欲望——は、英雄としてのヘクターという定型を崩していく。ヘクターの死のセンセーショナルな光景は、悲哀の情と同時に、サディスティックな興奮状態を生じさせ、この劇の終幕の不安、その不条理性をより効果的に演出する。そこで本発表では、テキスト及び歴史的なコンテキストから、甲冑と甲冑の剥ぎ取りという行為と、トロイの英雄が行う甲冑剥ぎ取りの行為、及び彼の死のコードを読み解いていく。

司会 東京女子大学教授 楠 明子

‘Yond gull Malvolio’ Twelfth Night における ‘Gull’ の表象

東京大学大学院 内丸 公平

Shakespeare 作 *Twelfth Night* に登場する Malvolio は謹厳実直な執事として従来読まれてきたが、そのイメージを常識とするあまり劇中でなぜ彼が ‘Peg-a-Ramsey’ や ‘Jezebel’ という好色な「女性」を表象する記号で譬えられ罵られるのか説明が困難とされてきた。この問題を解くべく本発表では Malvolio が ‘gull’ と呼ばれていることに着目し、当時数多く産出されていた ‘gull’ を巡る言説的文脈の中に Malvolio を位置づけ解釈する。当時 ‘gull’ は「女性化する男」を象徴的に表象する文化記号であり、Malvolio もそうした人物として了解されていたという新たな事実が明らかとなる。そしてこの ‘gull’ 表象を通じ *Twelfth Night* というテキスト自体が当時の「男-女/女-男」論争の文脈の中で理解されるべきものであることを指摘する。

“Rome itself hath tried” Marston の Antonio 二部作における「新しいローマ」としてのヴェネツィア表象

東京大学大学院 酒井 もえ

Marston の Antonio 二部作 (*Antonio and Mellida*, *Antonio's Revenge*) は、Shakespeare の *The Merchant of Venice* や *Orbello*、Jonson の *Volpone* などと共に初期近代イギリス演劇におけるヴェネツィア表象の重要な一角を形成しているにもかかわらず、ヴェネツィアというトポスに着目した研究はあまり行われていない。しかし同時代のいわゆる「ヴェネツィア神話 (myth of Venice)」、特にヴェネツィアを古代ローマの再来とする言説は、Antonio 二部作において重要な位置を占める。母方にイタリアの血を引き、作品のイタリア性が指摘される一方、セネカ悲劇の影響をも強く受けた Marston は、同時代のイタリアにおいてローマ的なものを表象するのに最適のロケーションとしてヴェネツィアを選んだのではないだろうか。本発表では Antonio 二部作をヴェネツィア神話との関わりに着目して読み直し、この作品がヴェネツィアを舞台とすることの意味を探るとともに、初期近代イギリス演劇におけるヴェネツィア表象と「ローマ性」の関わり的一端を明らかにすることを目的としたい。

第五室

司会 鳥取大学助教授 和田 綾子

‘Beware of being misled by his *Paradise Lost*’: Blake, *Europe*, ‘On the Morning of Christ’s Nativity’

神戸大学助教授 佐藤 ひかり

Blake が Milton に敬意を抱きつつもそのキリスト教観に対して批判的であったことは、*Paradise Lost* の Satan に Milton の独自性を読みとったことに集約される。しかし問題は、Milton が神として

描いた対象を Satan と取り替えさえすればよいのか、というところにある。

本論では Blake による Milton 批判を、二つの段階に分けて考える。Milton を批判しながらも ‘being misled by his *Paradise Lost*’ の陥穽に落ちかかっている Blake を第一段階とし、*Europe* (1794) と Milton の ‘On the Morning of Christ’s Nativity’(1629) を比較することによってこれを検証する。Blake による Milton 批判の第二段階を、Blake が ‘Nativity’ を題材として制作した二組の水彩画 (1809, 1815) に見だし、第一段階との違いを浮き彫りにする。結論として、異教の神々に対する Blake の関心が、1790年代と 1800年代とでは大きく異なっていることを指摘したい。

情念の耐えられない重さ 情念の生理学からブレイクの「毒の木」を読む

日本女子大学他非常勤講師 石塚 久郎

ブレイクの作品『経験の歌』の中の「毒の木」(“A Poison Tree”)は、一読すれば誰もが了解するモラル(意味)を持った非常にシンプルな詩である。語り手は「敵」に怒りを持つが、それを敵にぶつけず内に秘める。結果、その怒りは「毒の木の実」となり、敵がそれを食べることで死ぬ。つまり、詩のモラルは、怒りという感情をも自由に放出した方が、それを内に溜めこむよりはるかに健全だ、なぜなら、抑えこまれた怒りという感情は鬱積すれば致命的な結果を及ぼすからだ、ということだ。しかし、このようにパラフレーズした時、暗に怒りを近代的概念である「感情」の一つと見なしている。本発表は、怒りを「感情」という近代的概念では捉えず、そうした情動が当時理解されていた「情念」という概念において捉え、主に18世紀の医学の中で述べられる「情念の重さ」と情念の身体への作用(「情念の生理学」)を通して「毒に木」を読むことを試みる。

司会 筑波大学教授 今泉 容子

Anna Barbauld’s ‘To a Little Invisible Being...’: Maternity in Poetry and Medicine

ウォータールー大学助教授 Tristanne J. Connolly

Anna Barbauld’s ‘To a Little Invisible Being who is Expected Soon to Become Visible’ is perhaps the most anthologized British Romantic poem on maternity, and the least representative. Critics have tended to read the poem metaphysically, as an exploration of the mother’s subjectivity, overlooking its unusual attention to the physical experience of pregnancy. When Barbauld’s contemporary women poets write about infants, and, very rarely, unborn children, they emphasize fragility and innocence, and thus the child’s need for guidance and protection in a threatening world. Barbauld’s poem is surprisingly free of moral advice, and anxiety. It has more in common with medical texts of the long eighteenth century: anatomical art, with its impulse to expose the child to sight, and midwifery writing, with its insistence on nature as a unified, powerful, benevolent force to be followed or enabled, rather than interfered with or resisted.

第六室

司会 愛知学院大学助教授 ^{やま}山 ^{ぐち}口 ^{ひとし}均

『クライテリオン』のなかの「荒地」

大阪市立大学非常勤講師 ^で出 ^{ぐち}口 ^な菜 ^{つみ}摘

本発表では、T. S. エリオットの「荒地」を文芸評論雑誌『クライテリオン』という媒体を通して考察する。「荒地」は、1922年10月に『クライテリオン』の創刊号に掲載された。『クライテリオン』はエリオットが編集をつとめた文芸誌であり、エリオットが友人に宛てた手紙や同誌に掲載された「コメンタリー」などから、エリオットが確固たる編集方針を持ってこれにあたっていたことがうかがえる。エリオットは自らが編集する雑誌に、その編集方針に反しないものとして、自身の詩を掲載したのである。また、『クライテリオン』には、「荒地」だけではなく他の文学作品や評論が同時に掲載されている。「荒地」は『クライテリオン』に掲載された作品の一部として、さらに他の作品との関係性において読まれるべきものではないだろうか。本発表の目的は、『クライテリオン』の編集方針や「荒地」が掲載された創刊号の目次に注目を払い、「荒地」が『クライテリオン』の創刊号に掲載されたことの意味と、『クライテリオン』が「荒地」の解釈に及ぼした影響を考察することである。

Donne から G. Herbert へ

T. S. Eliot の Via Media の視点から

弘前大学教授 ^{むら}村 ^た田 ^{しゅん}俊 ^{いち}一

エリオットは、ダンの詩作品の中に、改宗に纏わる二つの宗教の狭間で思い悩む Via Media を読み込んでいる。一方、ハーバートを群小詩人から一流に評価したのは、ハーバートの Via Media には、ダンテの一句「みこころ聖意はすなはちわれらの平和」といった静かな平和な心境を見抜いたからである。このエリオットのダンからハーバート批評に見られる Via Media に対する考え方の変遷は、まさに彼自身の *The Waste Land* から、*The Hollow Men* を架け橋として、*Ash-Wednesday* までの姿に呼応するものであるが、この Via Media は究極的に「火と薔薇は一つになる」といった世界の中で捉えられて行くのである。このエリオットの背景には、英国国教会の伝統が内包している中世ヨーロッパ文化の包括性への憧れがあった。エリオットのハーバート再評価は、ダンの Via Media とは違った「感性の統合」を目指すエリオット自身の個人的な精神史の転換期でもあったのである。

司会 青山学院大学教授 ^さ佐 ^{とう}藤 ^{とおる}亨

神話的空間からウェールズ共同体へ

Dylan Thomas, *Portrait of the Artist as a Young Dog* をめぐって

大阪大学大学院 ^{なか}仲 ^と渡 ^{かず}一 ^み美

Dylan Thomas の後期短編集『仔犬のような芸術家の肖像』は、散文としては高い評価を得ながらも、彼の詩や散文、詩劇を含む全作品のなかで、どのような意義をもち、どのように位置づけされるの

かは、あまり議論されていない。しかし、この短編集は、トマスが初期の詩から、後期の詩へと量子的飛躍を遂げるための移行期の創作、踏まれなければならなかった重要なステップとして考えられる。

初期の自らの肉体が小宇宙をなす「創造と破壊」の詩の世界から、後期の外界の存在様式へ目を向け、ウェールズの自然を謳った宗教性を帯びた詩へと向かうために、トマスは言語そのものを志向するモダニズム的手法から、他者の言葉を志向するリアリズムの散文へと向かわなければならなかった。本発表は、詩における移行の契機となったのが、共同体表象の可能性を探ったこの短編集であることを明らかにする試みである。

Heaney と Dante ^{ダイレクト}方言 ^{ヴァナキュラー}から土地言葉へ

学習院大学大学院 ^{わし}鷺 ^{づか}塚 ^な奈 ^ほ保

Seamus Heaney が Joyce の重要性を強く意識し始めるのは詩集 *North* (1975) 出版後である。北アイルランド紛争のまっただ中で「歴史という悪夢」から目を覚まし、植民地教育によって植え付けられた言語的劣等感からみずからを解放しようとしたとき、イギリス諸島を経由せずにヨーロッパ文学の古典に直結できることを示した Joyce は従うべき指針であった。「アイルランド詩人を周縁へと追いやるイギリスの伝統から身をかわす」ために詩人の想像力は Dante をみずからの土地に引き寄せる。そして、生まれ故郷の方言に『神曲』に通じる広がりを見出す。Heaney は Dante との間に土地言葉の絆を作り上げることで、「あらゆるアイルランド人作家の遺産」とも言うべき「言語的ジレンマ」だけでなく、劣等感に囚われた「排他的」な「小文字の伝統」から自由になろうと試みたのだ。

第七室

司会 中央大学教授 ^{おお}大 ^た田 ^み美 ^わ和

コケットリーと女子教育

18世紀後半、英国における「改心するヒロイン」再考

学習院大学助手 ^{ふじ}藤 ^{さわ}澤 ^{よう}陽 ^こ子

18世紀後半の英国では、例えば Fanny Burney の *Evelina* (1778) にみられるように、性格上欠点のあるヒロインが様々な経験を通して改心していくという筋立ての小説が多く書かれた。本発表では、こうした「改心するヒロイン (reformed heroine)」が有した欠点に「コケットリー (coquetry)」という性質が含まれていたことに注目したい。ルソーはあくまで男性的な視点に立ってそれを女性の生来の魅力だと解釈したが、ウルストンクラフトを始めとする知識人たちは女性がコケティッシュなのは不適切な教育のためだと批判した。ところが、フランス革命に刺激された1790年代に出版された Amelia Opie の *Dangers of Coquetry* (1790年)、Elizabeth Inchbald の *A Simple Story* (1791年)、Mary Hays の *Memoirs of Emma Courtney* (1796年) という「改心物語」では、こうした2つの見方のどちらにも属さない複雑で戦略的なコケティッシュ・ヒロインが提示されている。

Disenchanting the Fairy Tale: A Reading of *Jane Eyre*

東京大学大学院 野津友里子

The purpose of this paper is to reveal the implicit feminist subtext that lies beneath the surface of *Jane Eyre* (1847) by clarifying the correlation between Jane's self-narration and the interpolating fairy-tale narrative of Edward Fairfax Rochester that finally overwrites her autobiography. Despite the fact that the novel has induced abundant criticism since its publication, Rochester's embedded fairy tale has hitherto been critically neglected. However, my contention is that by closely examining the narrative text of the novel, the radically subversive aspect of Rochester's patriarchal fairy-tale narrative and the ways in which not only Jane Eyre but also Bertha Mason revolt against its confining narrative frame may be revealed. Furthermore, by examining the contrasting fates of these two women who respectively revolt against Rochester's patriarchal narrative, this paper seeks to shed a new light upon the underlying feminist theme of Brontë's novel.

司会 大阪府立大学助教授 新井英永

テスのセクシュアリティ再考

テスの悲劇説明における語り手の動機との関連で

山形大学他非常勤講師 鈴木淳

ハーディの『テス』に関する論文は、非常に多い。その中でも、「清純な女性」(A Pure Woman)という副題と矛盾するテスのセクシュアリティの問題については、1980年代後半から90年代にかけて、当時流行していたフェミニズム理論との関係で多くの批評家たちによって論じられてきた。

だが、注意すべきは、それがあくまでもテキストの外側の理論であり、ハーディのテキストで直接的に示唆されているわけではないことである。したがって、本発表では、すでに先行研究によって明らかにされている「テスのセクシュアリティ」が持つ意味を、テキストの論理から考え直したい。その際、私が扱おうとしているのは、女性のセクシュアリティそのものではなく、それがこのテキストの「語り」にどう影響するかということである。最終的には、テキストにおいてヴィクトリア朝小説の伝統的語りの手法へのハーディの挑戦がどのような形でなされているかを明らかにしたい。

誠実な建築と不誠実な顔 *A Laodicean* 論

東京都立大学大学院 福原俊平

Thomas Hardy の *A Laodicean* は建築が前景化された小説であり、先行研究においても、小説の舞台であるスタンシー城が目撃されることが多い。スタンシー城はシンボリックに描かれ、住人の性格や小説のテーマを能弁に物語る。だが、スタンシー城の外に目を向けると、能弁なスタンシー城とは対照的に、二人の悪役の顔が、徹底して彼らのアイデンティティや秘密を物語らないことに気づく。ハーディ小説において、建築と顔はしばしば小説内の二次的なテキストとして多くのことを物語るため、物語らない彼らの顔は注目に値する。彼らの顔は、彼らのアイデンティティを徹底して隠し、欺く。本発表においては、「物語る」／「物語らない」という観点から建築と顔の表象を比較し、ヴィクトリア朝における道徳のコードと関係付けて議論することによって、建築および顔の読解可能性／不能性が、倫理の問題として扱われていることを示す。

第八室

司会 山形大学助教授 中村隆

観察される心理と身体

「グイネヴィアの弁明」における dramatic monologue の変奏

大阪大学大学院大学院 関良子

ウィリアム・モリスの“The Defence of Guenevere” (1858) は「危機的な状況に置かれた主人公が、言及はされないが作品内に存在すると想定される聴衆に胸中を語る」という形式をとっていることから、劇的独白の特徴をもつと、多くの批評家に指摘されている。しかし、劇的独白としての性質が顕著である一方で、この作品には通常排除されるはずの語り手が存在しており、その複雑な構造のためか、この作品の劇的独白性についての分析は、これまで殆ど手つかずの状態である。本発表では、“The Defence of Guenevere”に見られる劇的独白の要素を検証した後、改めて独白の枠外に存在する語り手の役割に注目し、本作品がヴィクトリア朝詩を特徴づける新しい詩的技法である劇的独白に、語り手の鋭い眼差しを導入することで劇的独白を変奏させ、当時の中世主義において蘇りつつあった「中世世界」に新しい光を浴びさせようとした試みであった点を指摘する。

ホモソーシャルな男たちと穢された女

『ドラキュラ』における Mina Harker

三重大学助教授 宮地信弘

Bram Stoker の *Dracula* (1897) は男たちのホモソーシャルな絆が前景化されたきわめて男根中心的な小説である。イギリス征服を企図して、迷信渦巻くトランシルヴァニアから19世紀末のイギリスに侵入してきた不死者ドラキュラ伯爵は、強い連帯感で結ばれた男たちによって阻止されてその目的を果たせず、イギリスから放逐される。イギリスにおいてドラキュラを迎え撃ち、ついにはトランシルヴァニアまで追跡して行ってその息の根を止める男たちの中心には、しかし、Mina Harker という女性がいる。彼女なくしてはドラキュラ退治はなしえないものであった。本発表では、ドラキュラの犠牲となりつつもドラキュラ退治を成功に導いていく Mina Harker がホモソーシャルな男たちの規範システムの中で彼らの anima (Mina のアナグラム) として位置づけられていくとき、どのような力が作用しているかについて考えていきたい。

司会 横浜国立大学助教授 宮崎かすみ

A Passage to India に見る他者理解の可能性

神戸大学大学院 西川和佳子

本発表では、E. M. Forster の *A Passage to India* (1924) が提示する他者理解のテーマについて考察したい。イギリス支配下のインドを舞台に様々な人間の交流を描いたこの作品は、近年では、ポストコロニアル批評やフェミニズム批評・ジェンダー批評の観点から、度々論じられるようになってきた。これらの批評に共通していることは、それぞれ、ヨーロッパ(支配者)／非ヨーロッパ(被支配

者)、男性／女性、異性愛／同性愛という二項対立に注目し、その複雑な関係が論じられているということである。Sharp が指摘しているように、*A Passage to India* を扱う批評の関心は、時代とともに物語の中核とも言えるマラー洞窟の謎の解明から、人種やジェンダーの問題へと移動しつつある(Sharp 76)。しかし、この変化に伴って、ある特定の二項対立のみが論じられることが多くなったと言えるのではないだろうか。ここでは、今一度マラー洞窟の表象に注目し、特定の二項対立の関係ではなく、あらゆる人間関係における他者理解という問題を考えてみたい。具体的には、2人のイギリス人女性、Adela と Mrs Moore の洞窟での体験を手がかりに、彼女達の他者に対する姿勢について検討し、彼女達の思考や価値観が他者を理解する上での壁となっている様を明らかにするつもりである。

The Longest Journey と *Maurice* における「自然」

東京都立大学大学院 石井義秀

E. M. Forster は、*The Longest Journey* (1907)、*Maurice* (1970) という2つもの姉妹作と言える自伝的小説を出した。前者が世間に知られた表の作品であるのに対し、後者は内に秘めた同性愛を正面から取り上げたため、身近な友人以外存在が知られていなかった裏の作品である。しかし、*The Longest Journey* にも曖昧な語りの中に、隠された形で同性愛の意識が読み取れる。本論では、同性愛に揺らぐ作者の意識を自己の「本性」に忠実な「自然児」及び外部環境としての「自然」、更にそれらに対する多義的な語りに注目しながら両作品を比較し、その意識の違いと作品への反映を読み解いていく。曖昧な語りは、一元的な物の見方を嫌う作者の信条を形成するのに大いに関連するので、高い評価を受けなかった両作品であるが、Forster の精神的な発展過程を見る上でも示唆に富むものと思われる。また両作品出版後に、それぞれ *Howards End* (1910) と *A Passage to India* (1924) を書き上げており、両傑作への準備作としても注目されよう。

第九室

司会 同志社大学助教授 山本 たえ 妙

Fashion/Modernism:

Virginia Woolf and the Question of the Literary Marketplace in *Orlando*

英国ヨーク大学大学院 秦 邦 生

Once dismissed as a minor novel among Virginia Woolf's entire oeuvre, *Orlando* (1928) has been reappraised from the 1980s as a work which envisions a radical potential of gender performativity by means of its hero-heroine's practices of cross-dressing. More recently, however, critics have started to qualify this evaluation by investigating the connection between Woolf's fantasies in *Orlando* and Orientalist fashion in the popular culture of the 1920s. My contention in this paper is that the connection between the two in fact goes deeper than this, sharing their roots in the early Bloomsbury milieu of the Hogarth Press, the Omega Workshops, and Paul Poiret's Paris fashion studio. From this viewpoint, I consider *Orlando*, especially its latter half, as Woolf's point of reflection over the ambiguous relation between her literary venture and commercial aspects of modern mass

culture; a turning point where Woolf reshapes her modernist project against the literary marketplace of the early twentieth century.

『波』におけるスーザン再考 自然、母性、共同体

青山学院大学大学院 横山 優子

ハイモダニズム文学の最高峰とも言うべき『波』(1931)は、モダニズム作家の美学の真髄であるかのように扱われてきた。しかし、近年、ウルフ作品を政治的文脈で捉えなおす必要性が唱えられつつある。その顕著な例として、Merry Pawlowski 編集の *Virginia Woolf and Fascism* (2001) が挙げられる。

Jessica Berman が同書の中で、ファシズムとの関係で『波』を分析しているように、ファシズムの勢力が増大する以前に書かれた作品に対しても、『三ギニー』や『幕間』のようなファシズム全盛期の作品同様の目が向けられている。

本発表では、Berman の実証的な側面のアプローチを推進し、ファシズムをテーマとして『波』を分析する。その際、女性をファシズム的な共同体における単なる被害者と捉えるのではなく、女性の領域での役割に適合した人物と捉えられてきたスーザンに焦点を当てながら、共同体形成の加担者としての可能性を浮き彫りにしたい。

司会 東京学芸大学助教授 大田 信 良

パジェント小説の系譜 ヴァージニア・ウルフ『幕間』を経て

A. S. バイアット *The Virgin in the Garden* にいたるまで

早稲田大学客員専任講師 吉野 亜 矢 子

20世紀初頭イギリスを席卷したパジェント(歴史野外劇)ブームは、しばしば数千人単位の演技者を集め、同時代人に「パジェント病(Pageantitis)」と呼ばれた。誕生当初は奇妙な社会現象、あるいは流行とみなされたパジェントだが、その脚本作家達にはアーサー・キラークーチや、ヘンリー・ニューボルト、E. M. フォスターをも含み、流行の一言では切り捨てられない側面も持っている。ハイ・カルチャーとポピュラーカルチャーの交じり合うトポスを提供していたのである。

この発表では、1905年の誕生以来、小説や戯曲に描かれてきたパジェントの系譜を辿る。英国社会と文化を揺るがした第一次大戦を超えて、パジェントは生き延びていったが、パジェントを描いた小説や戯曲は、パジェントを装置として使いながら社会の変化、パジェントの社会における意味合いの変化を映し出している。

T. S. Eliot “The Man Who Was King” と Kipling “The Man Who Would Be King”

「大洋横断的英米文学」の視座をさぐる

名古屋市立大学教授 成 田 興 史

大洋横断という切口から、エリオットのセントルイス時代、とくに“The Man Who Was King”(1905)に焦点をあてる。この習作は、プロット分析から明らかになるように、cultural Others をめぐって現代の文化相対主義に通じる価値観を先取りし、また民族的な価値観をもちこんでいる。それを可能ならしめたのは異文化の交流の現場であるセントルイス万博を、作者が歴訪していたことであ

ろう。フィリピン展示場では、文化人類学者が率先して Igorot Village 他に「現地人」展示の挙に
でるといふ由々しい事態が出来してただけに、良識ありラディカルでもあるユニテリアン家庭の
子弟にとって衝撃的事件であったことが推量されるからである。エリオットはごく幼いころから生
涯、キプリングの得段な愛読者であった。後段では、そのことを大前提に彼の習作をキプリング“The
Man Who Would Be King” (1888) と比較することから作者の Transoceanic 断面を切り出そうと試みる。

第十室

司会 一橋大学教授 かな い よし ひこ
金 井 嘉 彦

「悪魔／セックスの哀しみ」 『FINEGANZ・ウエイク』第2部第1章の楽園神話

東北学院大学専任講師 よこ うち かず お
横 内 一 雄

本発表では、Joyce の *Finnegans Wake* 第2部第1章を取り上げ、そこで子どもたちの興じる色当てゲー
ムが両親の罪と墮落、あるいは創世記の楽園神話にたいするひとつの解釈になっていることを究明
する。まず、このゲームが HCE の起こしたフェニックス公園事件や創世記の楽園神話の再現になっ
ていることを確認してから、それらの事件が性的成熟を迎えつつある子どもたちによっていかに解
釈されているかを論じる。次に、性的に奥手であるために求愛相手に晒われた Glugg が、いかにそ
の屈辱を乗り越えて成熟を手に入れようとしているか、さらにその相手の Izod もまた彼女なりの
変化をとげようとしているさまをも概観することにより、これまで物語の展開とは無関係に固定的
に捉えられがちであったこの二人の人物造型に若干の修正を加える。そして最後に、いわゆる現在
の主題がこうして子どもたちの性的成熟過程によって解釈されることの意義を考える。

司会 横浜市立大学準教授 かた やま あ き
片 山 亜 紀

戦争加担者から平和主義者へ

Vera Brittain の *The Dark Tide* (1923) を読む

慶應義塾大学大学院 うえ だ あつ こ
上 田 敦 子

ヴェラ・ブリテン (1893-1970) は、第一次世界大戦中、VAD (救急看護奉仕隊) として活躍した。
当時、肉体労働は戦闘行為と結び付けられており、VAD になることにより、出兵した恋人ローラ
ンドと経験を共有することができると考えたからである。戦時中、女性は男性的になることができ
た。それには、女権拡張に貢献したという肯定的な見方もある。しかし、ローランドとともに戦っ
た先には、彼の死があったのと同様に、男女がともに戦った結果は悲惨であった。この経験により、
ブリテンは男性的な戦争に女性が加担した意味で、従来男女関係の延長が戦争とその惨禍をも
たらしたのだと考えるようになる。そして、女性の歴史上の役割を考え直し、平和のためには、女
性は女性的な価値観で政治を誘導し、世の中に奉仕するべきだと考える。本発表では、処女作 *The
Dark Tide* (1923) を通して、以上のことを論じる。

カリブの魔女と娘たち 逸脱者から救済者への表象変遷をたどって

お茶の水女子大学大学院 いわ せ ゆ か
岩 瀬 由 佳

現在、フィクションに限らず、映画やドラマの分野においても「魔女」や「魔法使い」をモチー
フとする作品が次々と登場し、世界的な人気を博している。興味深いことに、歴史的に旧イギリス
領カリブ海地域出身の作家たちの作品にもその傾向が非常に強い。本発表では、ジャマイカ出身の
Herbert G. de Lisser の *The White Witch of Rosehall* (1929) から論を発し、いずれも 1940 年代生まれのア
フロ系現代女性作家である Erna Brodber (ジャマイカ出身)、Jamaica Kincaid (アンティグア出身) らの
作品における「魔女表象」を比較検討することによって浮かび上がる植民地内部の社会権力構造シ
ステムと、それを支える「西欧の優位性」、「父権制の絶対性」といかに対峙し、転倒しえるかとい
う「カリブの新たな娘たち」の戦略を読み解いてみたい。

第十一室

司会 福島大学助教授 さか もと めぐみ
坂 本 恵

スコットランド演劇の現在 劇作家 Gregory Burke の作品を中心に

東京工業大学助教授 たに おか たけ ひこ
谷 岡 健 彦

2006 年のスコットランド国立劇場の創設を間近に控え、スコットランドの演劇界はこのところ、
ひときわ活気づいているように見える。なかでも、2001 年夏にエディンバラの Traverse 劇場で初演
された処女戯曲 *Gagarin Way* が、英語圏のみならず世界各地で上演されるヒット作となった Gregory
Burke の活躍は、近年のスコットランド演劇の活力をよく物語る事例と言えよう。本発表では、こ
の『ガガーリン・ウェイ』のほか、パークがその後発表した *The Straits* (2003)、*On Tour* (2005) を取
り上げ、この若い劇作家の関心の所在を探ってみることにしたい。舞台となっている場所や扱って
いる題材の点では大きく異なる 3 作だが、そこに一貫して流れているモチーフ、英国社会を大きく
変質させることとなった「1980 年代」という時代に対するパークの冷ややかな眼差しを浮かび上
がらせたいと考えている。

流れる「血」、変貌する主体 オーガスト・ウィルソンの『キング・ヘドリー 2 世』

大阪外国語大学大学院 あま の たか し 史
天 野 貴 史

アフリカン・アメリカンの 20 世紀を描き出すオーガスト・ウィルソンのサイクル劇プロジェク
トの第 8 作『キング・ヘドリー 2 世』におけるエスターおばさんの死と再生には、ハリー・エラム・
ジュニアをはじめとする様々な批評家の関心が注がれてきた。だが、彼らの読みには深刻な盲点
がある。黒人青年キングを再生の儀式に供されるいけにえと理解することに異論はないとしても、
いけにえがなぜキングでなければならないのかという根本的な問いがエラムにすら見えていない。
この問いは「キングとは誰なのか」という議論を導くものであり、大地に注がれるキングの血に人種
的・歴史的意味を書き込まない彼らの読みは、老婆再生の儀式の普遍的な側面のみを描いてるにす

第十二室

司会 金城学院大学助教授 高野 祐二

On the Nature of Focus Feature Organization: Toward a Unified Account of the Additive *Mo* 'Also'

慶応義塾大学助教授 星 浩司

Taking Kayne's (1998, 2000) derivational analysis of focus-related elements such as *only*, *also/too*, and *even* in English as a point of departure, this paper explores the nature of focus feature organization, aiming at a unified account of the additive use of a K-particle (= *kakari-zyosi*) *mo* 'also' in Japanese. It is proposed that in principle an interpretable focus feature [focus] and an uninterpretable focus feature [uFoc] in the domain of the Foc head occupied by *mo* can be separated under some "locality" condition. The analysis also naturally captures various relevant properties without recourse to LF movement: particle orders, the upper-boundedness of *wide* focus, argument/adjunct asymmetry in *wide* focus, the absence of sideway focus shift, and the absence of *wide* focus readings in dislocated DP+*mo* (cf. Aoyagi 1998, 1999). To the extent that the advanced purely derivational approach is correct, it provides another empirical support for the single-cycle computational system in Chomsky (2001a,b).

On the Category and Interpretation of Partial Control Infinitives

大阪大学大学院 吉本 圭佑

本発表の目的は Partial Control (PC) の解釈の派生を、不定詞節の範疇の区別によって説明することである。Partial Control とは、補文に collective predicates がくるときに、PRO の指示対象が先行詞以外の人を含むという現象である。

(1) John_i preferred [PRO_i, to gather at 6.]

法動詞、相動詞、含意動詞ではこの解釈はできない (EC) のに対し、叙実動詞、命題動詞、願望動詞、疑問動詞ではできるという違いがある。

この2つの動詞クラスを比較すると、EC 動詞は IP を PC 動詞は CP を補文にとるということが分かる。CP は強い phase なので PRO は一旦不特定複数の解釈として spell-out され、さらにその一部を先行詞が束縛することによって部分解釈がうまれるのである。

司会 岐阜大学助教授 牧 秀樹

文頭の付加詞に関する統語的一考察

筑波大学大学院大学院 谷川 晋一

付加詞は、統語的に、文付加詞と VP 付加詞の2つに分類することができ、両方とも、文頭に生起することができる。Kayne (1994) や Rizzi (1997) は、文頭の付加詞は、話題化構文の話題要素と同じ位置を占めていると主張している。しかしながら、文頭の文付加詞は、移動の鳥や移動の有無等に関して、話題要素や文頭の VP 付加詞と異なった振る舞いを見せる。

ぎない。そこで本論では、エスターおばさん復活の儀式という強力な聖書の象徴の徹底的な脱神秘化ならびに人種化・政治化を通して、従来の批評の盲点たるこの問いに取り組む。この作業はまた、キングの主体性をウィルソンの他の作品群——『2本の列車が走る』と『7本のギター』——との間テキスト性において論じることでもある。

司会 京都大学教授 若島 正

ポストモダン時代のエンディング考 Muriel Spark の *The Finishing School*

三重大学非常勤講師 沢田 知香子

Muriel Spark の 22 作目の小説 *The Finishing School* (2004) は、ポストモダン時代における「終わり」についての考察として読むことのできる作品である。本論は、「終わり」というテーマを中心に、スパークが描き出す現代の世界が抱える問題とともに、その世界における芸術の問題を探る。まず、Jean Baudrillard が *The Illusion of the End* (1992) で展開する「終わり」についての議論と比較しながら、スパークの小説の枠組を分析し、ポストモダン時代の終わりなき終わりとしてリサイクルのパターンが浮かび上がってくることを示す。次に、現代芸術における「リプロダクション」の問題と関連して、クリエイティブ・ライティングが如何に『フィニッシング・スクール』の重要なトピックになっているかを検討する。最後に、スパークの小説自体のエンディングをとりあげ、そこに終わりの幻想のなかで見失われた現在を見いだすことができることを指摘し、結論とする。

記憶の手触りを再現する Kazuo Ishiguro の作品における記憶表象の変遷

信州大学特別講師 三村 尚央

カズオ・イシグロは第六作目に当たる *Never Let Me Go* について、「この小説の語りは、それまでの自分の作品の語りとは異なる」と説明している。*The Remains of the Day* に代表される彼の作品群は、『信用できない語り』という言葉で説明されることが多いが、*Never Let Me Go* では、過去の記憶は語り手に安心感と安らぎをもたらすものとなっている。本発表では、イシグロ作品での記憶の描かれ方の変遷を追ってゆく。まず『信用できない語り』の特徴を確認したのち、*When We Were Orphans* や *Never* が示す、語り手の主体性を支える記憶が持つポジティブな働きについて考察する。最後に記憶が生成する瞬間の質感を再現しようとする *The Unconsoled* の語りについて考察する。これら3つの過程を、それぞれ「自己欺瞞」、「ノスタルジー」そして「写真的記憶」という観点から分析してゆきたい。

本稿は、文頭の VP 付加詞と文付加詞の統語的違いを明らかにした上で、その違いが、素性照合と指定部への移動があるかないかに起因していると主張する。具体的には、Radford (2004) の話題化構文の分析を採用し、文頭の VP 付加詞は、話題要素と同様に、主要部 Top が持つ EPP 素性の要請により、VP 内から文頭の TopP 指定部に移動している一方で、文頭の文付加詞は、TP 等の範疇に基底的に付加していると主張する。そして、この分析に基づき、2つの文頭の付加詞の統語的な違いを説明する。

have NP V-ing への構文論的アプローチ

埼玉学園大学助教授 現 影 秀 昭

本発表は George had us all laughing. の様な英語特有の have NP V-ing 構文 (以下 HNING) を、その特性がそれを構成する各要素からは予測できない形式と意味の組み合わせであるとみなし、様々な下位構文 (経験、使役、結果、存在、描写、イディオム) が構文の family を形成し、かつ構文間には主要部 have がもつ「所有」の意味を直接反映した「存在」の HNING をプロトタイプとする拡張関係があるという仮説を Goldberg and Jackendoff (2004) および Kajita (1997) に基づいて論証する。即ち①使役は keep NP V-ing (使役) をモデルとして経験の HNING を基本形として拡張し、②状態変化が結果状態まで含意する HNING の結果構文は使役を基本形として拡張したことを論じ、③非現実世界を仮定する描写の HNING は、より基本的な結果構文や使役構文と継承のリンクで結ばれ、④ have it coming to NP (「当然の報いを受ける」) は encoding idiom で「経験」の解釈が与えられることを論証する。

第十三室 〔特別研究発表〕

司会 関西外国語大学教授 豊 田 昌 倫

New Speech Acts for Old, or How to Make a Drama out of a Speech Act:

The Speech Act of Apology in the Film *A Fish Called Wanda*

ランカスター大学教授 Mick Short

Although speech act theory has been applied to the analysis of fictional texts, the accounts tend to use early Austinian/Searlian versions of speech act theory and do not make as much use as they could of the more recent work of sociolinguists commenting on how speech acts are instantiated in real conversational data. Nor do they relate speech act patterns in fiction to foregrounding theory in any detail. This paper discusses the ways in which both earlier and later forms of speech act analysis can be used in the stylistic analysis of fictional texts and also relates speech act theory to the stylistic theory of foregrounding. In particular, it explores in detail some of the apology sequences in *A Fish Called Wanda* and explores how they contribute (a) to the film's humour, (b) to the development of contrasting characterisations for two of the film's main characters, and (c) provide the film with a thematic 'speech act organisational structure' which complements its plot structure.

SYMPOSIA

第七部門

アメリカ文化・国家と恐怖 テロはどこにあるのか？

司会 一橋大学助教授 新田 啓子
講師 慶応義塾大学教授 巽 孝之
講師 テキサス大学オースティン校教授 (日本文化研究) Susan Napier
講師 一橋大学教授 鵜飼 哲 (フランス文学・思想)

新田 啓子

その建国時より、そしてとりわけこの30年余、米国には「暴力を通した国民化」とも言うべき現象が目につくこと甚だしい。

これはつまり、「暴力的な他者」に傷つく自己を想定することで、「アメリカ＝被害者」という主体を築き上げること。そして、国際関係に何らかの「不正義」を発見し、アメリカ自らがそれを糾す暴力の主体となることを容認する現象である。

この動きは現ブッシュ政権が戦争を正当化する言辞に明示されているが、もとよりこうした言説は彼の専売特許ではない。国家的「傷」をファンタジー化する「政治儀式」は、同国では永らく繰り返されてきたものであり、公／私にわたる「人文的想像力」は、この「恐怖の文化」と特に密接な関係を結んできたと言える。

本企画は、こうした現状認識を裏付ける事象を近現代文学や文化状況の中に探る他、それへの応答として模索されるべき今後の批評的営みについて、幾許かの提言を行おうと目論むものである。

Catastrophilia

巽 孝之

何らかの終末論的破局を目撃してもなお、文学的想像力が自身の範疇に留まろうとしたら、何らかのブラックユーモアをもって対処するほかはない。たとえば、Mark Twain が1905年ごろ創作し、米西戦争とフィリピン＝アメリカ戦争への辛辣な揶揄を含む短篇“The War Prayer”では、戦争への祈りが徹底的にパロディ化され、祈りそのものが戦争となるレトリックが暴露される。それから一世紀、北米で広く読まれる祈りの指南書が大抵“Spiritual Warfare”や“Prayer Warrior”といった理想を掲げているのは、とうにトウエインが批判したはずの帝国主義が、テロ多発時代を迎え、広く自然化し透明化してしまった皮肉である。破局を解決するより破局そのものに眩惑されてしまうアメリカ的精神とは、いったい何か。Mark Senvold の説く“Catastrophilia”の概念を導入して考える。

終末の映画をめぐる日本とアメリカ

スーザン・J・ネイピア

本発表は、私がテキサス大学オースティン校で担当する授業、「終末の映画」に基づいている。世界人類の滅亡というシナリオをめぐる制作された映画の数々がそこでの研究対象であり、その問題系を説き起こすために最初に扱う作品は、イングマル・ベルイマン監督によるスウェーデン映

画の傑作、『第7の封印』である。だが、授業の大部分で問題になるのは日本とアメリカにおける終末の解釈であり、そのことはまさに、この問題に対する関心が両国において突出して高いことを示している。

本発表の問題意識はそこにある。ここでは、アメリカと日本の文化の一体いかなる局面が、こうした「終末指向」を導くのか、その問題を探究してみたい。同時に、終末を描くイマジネーションの形式に関して両国ではいかなる違いがあるのか、この点に関して検討する。『ターミネーター2』、『アルマゲドン』、『マトリックス』等のアメリカ映画、並びに黒澤明の『夢』や『生き物の記録』、『新世紀エヴァンゲリオン』、『風の谷のナウシカ』や『AKIRA』等のアニメ作品に言及しながら、以上について論じたい。

ある妄想の未来 　いかにテロの影の外に出るか

鶴 飼 哲

強者であり加害者である側ががみずからを弱者であり被害者であると信じ込むとき、そこに包圍妄想が生まれる。人種隔離政策時代の南アフリカ共和国、分離壁建設を進める現在のイスラエルはその典型的な事例だが、そもそも植民社会は台湾、朝鮮、「満州」の日本人社会を含め、いずれも同様の集団的妄想を経験してきた。「テロリズム」に対する武力による安全の確保というプログラムを押しつけることで、アメリカ合衆国はその植民国家としての起源に遡る妄想を、いまや「人類」全体に投影しつつある。ジャック・デリダは人種隔離政策時代の南アフリカを論じた最初のテキスト「人種主義の最後の言葉」ですでにこの問題に触れていたが、J. M. クッツェーのいくつかの作品は南アフリカの「白人」がいかにしてこの妄想の外に出るかを探求することで同時に惑星的な課題に回答している。デリダ(『ならず者たち』)とクッツェー(『恥辱』『動物のいのち』)はいずれもそこに動物の問いを接続する。両者のアプローチを突き合わせることでそのことの含意を探りたい。

第 八 部 門

多重化するジャンルの詩学

司会・講師	駒 沢 大 学 教 授	富 士 川 義 之
講師	立 教 大 学 嘱 託 講 師	関 口 千 亜 紀
講師	獨 協 大 学 教 授	原 成 吉
講師	詩 人、多 摩 美 術 大 学 教 授 (言 語 芸 術)	平 出 隆

詩と散文のあいだ

富 士 川 義 之

どうひいき目に見ても、現在、詩の力が衰えていることは否みがたいだろう。このようなシンポジウムが企画された背景には、そうした危機感があるのかもしれない。その原因がどこにあるかを探っていくと、詩の世界が自閉的になっていることが第一に挙げられる。だが、必ずしもそうとは言えぬ、果敢な試みがなされている場合も時に目につく。絵、散文、オブジェなどを積極的に取り

込もうとする企てである。20世紀のモダニズムに始まり現在も一部で実践されているそうした「交差するジャンルの詩学」がどのようなものであるかを、ここでは考察することになる。何しろ広汎にわたる話題であるから、結論など出せるはずがない。20世紀英米詩の具体例に即して、各講師が自らの見解を率直に述べるしかないだろう。私としては、詩と散文の交差や接近を旨とする20世紀英米詩人や作家の企てを概括的に述べることになるだろう。

コンポジション詩人 Marianne Moore と写真

関 口 千 亜 紀

T. S. Eliot から「永続性をもつわずかな詩」を書く一人として称賛された Moore だが、自らを「詩人」、自作を「詩」とみなすのを嫌った。Moore によれば、自作は“exercises in composition” 或いは“observations,” その引用の多い文体は“hybrid method of composition”である。それでも「詩」と呼ばれるのならば、他のカテゴリーに入らないからだ、と説明している。

詩“Poetry”の冒頭でも詩嫌いが表明されるが、なぜ Moore は「詩」という名称を拒んだのか。Moore のいう“composition”と「詩」との違いは何か。本発表では、写真が Moore の詩作と作品に果たした役割を手がかりにこれらの問いを考察したい。新聞・雑誌の写真、その切り抜き、スクラップブック、写真による疑似体験と詩の関わりを検討し、Moore のモダニズムと近代物質文化との結びつきを示唆したい。

「山水画」と長篇詩の詩学

原 成 吉

Gary Snyder が 40 年にわたって書き続けた長篇詩 *Mountains and Rivers Without End* (1996) は、環太平洋文化のなかで禅仏教や生態地域主義の実践を通して紡ぎ出された 39 の詩篇から構成されている。この作品は、Ezra Pound の *The Cantos* や William Carlos Williams の *Paterson*, そして Charles Olson の *The Maximus Poems* へと続くアメリカ詩の伝統に位置づけることができよう。スナイダーは、この伝統に「山水画」という新たな風景の詩学を加えることで彼独自の折衷的な作品を生み出した。冒頭の作品“Endless Streams and Mountains”を手がかりに、山水画とこの長篇詩の構成について考えてみたい。さらに、多重化するジャンルの詩学という視点から Poetry Reading についてもお話ししたい。

言語芸術における領域の問題

平 出 隆

散文詩という形式は、その発生から、散文と詩という対立的な二項の合体した、いわばキマイラとしての性質をもってきた。しかし、今日では、その形式は馴致され、安定した領域をつくり、発生当時の衝撃を、いっそもちにくくなってきている。二つの項の結合、分離、重層という、ここにあらわれている問題は、広く領域の問題といえる。

隣接し、あるいは呼応しあう領域のあいだは、どのような状態にあるのか。そもそもジャンルとはどのような概念か。この場合、言葉以外の媒体によるアナロジーは可能であろうか。たとえば、ドイツ現代美術の巨匠 Gerhard Richter の、写真のようで写真でなく、ボケやブレなどを意識的に絵筆で写し取ったような絵画を例として、考察してみたい。そこには、写真と絵画とが相互に否定しあう二重否定の場が生れている。ひるがえって、散文と詩とが二重否定を起しうる未明の領域について、示唆してみたい。

第九部門

南の周縁から問う“アメリカ”

司会・講師	明治大学教授	菅 啓 次 郎
講師	東京外国語大学教授 (文化人類学)	今 福 龍 太
講師	琉球大学助教授	喜 納 育 江
講師	青山学院女子短期大学助教授	斉 藤 修 三

アメリカ合衆国はみずからを裏切ってきた。その政治や戦略は「民主主義」の理念との間に大きな齟齬を来している。国家のさまざまな周縁部は、そんな綻びが端的に露出する地帯だ。ここでは南西部やカリブ海域などの周縁で生まれる文学から、合衆国の政治、ジェンダー、民族の諸問題を考えてみたい。周縁とは中心(政権)が指定するシステムにおける対抗軸なのではなく、はるかに多様な抵抗の可能性をさす。それは地理的な場所ではなく、個人や共同体の分散的なありようを射程に入れた概念だ。マイノリティの作家・詩人が論じられるが、それら複数の文学を閉じた固定的実体としては考えない。むしろ表面上孤立しているかに見える営みが、他の作家や集団へと連結される契機に注目したい。社会の周縁で抑圧された存在を可視化し、埋蔵されている過去に声を与えること。それが文学の大きな役割だと考えるためだ。

アメリカス、〈関係〉の錯綜体

菅 啓 次 郎

どんなに小さなものであれアメリカスを構成する個々の要素の来歴に注目すると、ただちにその背後にある地球大のひろがりを感じる。現代文学の風景の中では、そのことはとりわけ一群の「エスニック」作家たちの作品において意識的に提示されることが多いだろう。もちろん、創作には同一性の構築と解体という双方向の動きがつねにこめられている以上、起源の場所を求め現実世界に遡行して見取り図を作成してゆくこと自体にはあまり意味がない。それでもひとつの表象宇宙の構成のために動員される数々の現実的な力線を明るみに出すことは、人々が共有する最大公約数的な歴史像に必ず変更を強いる。作家のヴィジョンをどう受け止め、記述という場面においていったん静止状態に置かれた集積的理解を、いかに再流動化するか。ここでは種々の〈関係〉の錯綜体としての現代アメリカの〈シマ〉における、創作の苦境と可能性を論じる。

“ex-isle”の群島

今 福 龍 太

17～8年前にアルリスタやラロ・デルガードをめぐるって書いたとき、狭義の「チカーノ文学」という枠組みはまったく思考の外にあった。戦闘的チカニスモの作家・詩人の声のなかに、ウチナンチューやパレスティナ人の声の筋をすでに聴きとっていたのかもしれない。それ以後私は、チカーノと認定される作家による文学を論じるときも、議論の地平を、あくまで「アメリカ」という想像の共同体のエッジからいま何が生まれているか、それが、アメリカという理念をいかに更新し、ひいては、現代世界に関わる新たな文化ヴィジョンにたいしていかなる刺激を与えているのか、という方向に拓くように努めてきた。「チカーノ性」を無数の場所に散種し、逆に「カリブ海性」や「アイリッシュネス」をチカーノの領土にさぐりあてる、というようなポエティックな飛躍のもつ膂力

をつねに私は持みたいと考えている。“isle”(囲い込まれたシマ=エスニシティ=専門性)のなかで自閉的に語るよりも、ex-isle(= exile)の運動性に並走したい。

架け橋としての言語 チカーノ文学における La Malinche の表象

喜 納 育 江

通訳そして愛人として Cort 斯に仕えた La Malinche は、アステカ文明に破滅をもたらした悪女というのが通説であったが、チカーノ文学においてその表象は書き換えられる。Gloria Anzald 慧や Ana Castillo など、チカーノの書き手たちにとって La Malinche は、神格化された伝説の先住民女性の一人であり、文学的想像力の源泉でもある。複数の言語と世界観の交差する場所に身を置き、自らの身体とセクシュアリティを拠り所として生きた La Malinche は、境域におけるその性と正の道程そのものを新しい文化として呈示したとも言える。米墨国境地帯で、人種・階級・ジェンダーのどれにおいても差異と力関係の現実を突きつけられるチカーノにとって、言語は、差異からの拒絶や逃走ではなく差異との架け橋を目指すところに生まれる。La Malinche をアーキタイプとするチカーノの言語創造のプロセスに注目したい。

アメリカスの詩学

チカーノ・ラティーノが響かせるヴァナキュラーなシマ周縁言葉

斉 藤 修 三

二つの円を思い描いてみる。一つは米国を中心とし、もう一つは中南米を広く覆う縦長の楕円形。南北アメリカ大陸で隣接するこれら二つの円が、政治・経済・文化の各方面で近年ますます重なり合うにつれ、様々な局面でグローバル化とナショナリズムは火花を散らす。ここでカギを握るのが、二つの円周部の交錯する境域に身を置く人々、つまりチカーノ(メキシコ系アメリカ人)をはじめとするラティーノである。長いこと「北」の世界では「南のよそ者」扱いされ、「南」の世界でも「北に染まった者」と見なされ、双方からシマ周縁化された境域にしか居場所を持たなかった彼・彼女たちは、やがて「北から南を考え、南から北を考える」という境域特有の複眼的思考の往還の中で、この「どちらでもない」という非・場所性を手がかりとした様々な文化的表現を生み出してきた。国境を越え、南北を軸とした人・金・物・情報の移動と再定住が引き起こすローカルな文化変容をいくつか具体的に検証しながら、マイクロな声の中に「アメリカス」の来し方行く末を見ずえるマクロな響きを聴き取ってみたい。

第十部門

中世文献の電子ファイル化とその利用

司会・講師	東京慈恵会医科大学助教授	小原平
講師	オランダ芸術科学院ホイヘンス研究所研究部長 (オランダ語学文学研究、コーパス言語学)	Karina van Dalen-Oskam
講師	京都大学助教授	喜納育江
講師	広島修道大学助教授	斉藤修三

小原平

近年コンピュータの発達により、中世研究においてマニュスクリプトあるいはテキストを電子化し、それを基に調査研究を行うことが一般化してきている。この電子化の過程は、マニュスクリプトとテキストの関係を再考したり、マニュスクリプトそのものの研究を深めたり、さらにはこれまでほとんど不可能であったテキスト分析を可能にしたりしている。このシンポジウムでは中世研究における文献の電子化の方法とそれによる研究事例を検討する。まずマニュスクリプトをデジタル画像化して、加工が容易で、いくつかの画像を比較対照することが簡単にできる特徴を利用して行った研究を報告する。さらに、テキスト分析に電子テキストを利用した研究を報告する。ここでは、統語研究といった純粋に言語学的な研究と、書き手や作者の分析といったより書誌学的な研究のどちらにも電子テキストが利用できることを示す。

The *Cely Letters* における各書き手の書記素分析

The National Archives のデジタル画像を利用して

小原平

15世紀後半に書かれた書簡のコレクションである *The Cely Letters* の41人の書き手たちの書記素を、EETSのHanhams版のテキストをベースにして、英国のThe National Archivesで撮影されたデジタル画像を利用して分析する。書記素のデータベースを作成して、それをもとに、各書き手の特徴をまとめ、その特徴を電子化したテキストにタグ付けしていく。これらの特徴を組み合わせることにより、書き手の違いを比較的たやすく区別できるようになることを示し、同時にいくつかの問題点も指摘したい。このような研究では、市販のテキストをベースにしている場合は、使われている文字の graphemic な分類は可能であるが、さらに突っ込んで allographic variation がどうなっているのかを知ることはできない。オリジナルドキュメントのデジタル画像を利用することにより、この領域に光を当て、graphetic な分類も研究に十分利用できることを示したい。

Textual Relationships and Author Differentiation

Karina van Dalen-Oskam

I will present an overview of the ways in which new computer-assisted methods and techniques for authorship attribution and stylistics can be refined, tested and calibrated for use in literary and historical research. Computer-assisted authorship studies depart from the assumption that every author is unique and that an extensive quantitative analysis of his/her text(s) provides a means to distinguish authors from each other. In this,

it takes prime interest in unconscious style markers because it is thought that conscious stylistic decisions are open to imitation, deliberate or otherwise. Authorship attribution has reached a high level of reliability and repeatability. Literary research shall benefit from this when the measures and techniques of authorship studies will be explained in stylistic terms. Authorship studies statistically proofs that texts/authors differ; stylistics will help to describe how they differ. I will illustrate this with examples from Dutch and English literature.

史的コーパスを利用した英語史研究

中英語後期の文献の分析例から

家入葉子

Aitchison & Agnihotri (1985) は、統語上の変化には時間がかかるので分析が容易ではなく、したがってまだ知られていないことが多い、と指摘した。10年後に Rickford, et al. (1995) が、やはり音韻論研究などに比べて統語論研究、特に英語史とも関連性が高いヴァリエーションの研究が遅れていることを指摘している。それからさらに10年が経過した現在ではどうであろうか。Helsinki Corpus が完成してからほぼ15年が経過したところで、テキストの電子化により英語史研究がどのように変化してきたのか、またどのような課題があるのかについて論じてみたい。『パストン家書簡集』など、中英語後期の文献の分析例に言及しながら、歴史的コーパスの特徴と取り扱い上の問題点、統語研究を目的としたタグ付けの必要性(および不必要性)について、考察を進める。

Julian of Norwich の Short Text 二つの校訂版の比較

吉川史子

本発表は Julian of Norwich の *Revelations of Divine Love* の Short Text を含む現存する唯一の写本 B. L. Additional MS 37790 を扱う。このテキストを校訂した主なものに、Beer (1978) と Colledge and Walsh (1978) があるが、両者の校訂はこの写本の校正者が施した訂正の採用の仕方に関して特に大きな違いが見られる。ここでは、校正者が訂正を施した箇所と、Beer (1978: 20-22) によって校正者が訂正を施さなかったのが疑問視されているところを中心に、B. L. Additional MS 37790 のマイクロフィルムをデジタル化したファイルを利用して Colledge and Walsh (1978) の校訂と比較し、もともとの写字生の読みと、校正者の読みについて考察する。

第十一部門

形式と意味の接点

司会・講師	学習院大学教授	たか 高	み 見	けん 健	いち 一
講師	筑波大学教授	ひろ 廣	せ 瀬	ゆき 幸	お 生
講師	東京大学助教授	にし 西	むら 村	よし 義	き 樹
講師	大阪大学助教授	おか 岡	だ 田	さだ 禎	ゆき 之

高見健一

このシンポジウムでは、英語や日本語の様々な構文(形式)に意味や機能がどのように関わっているかを議論する。そして、構文を扱う際に、意味や機能、認知、談話要因等がいかに重要な役割を果たしているかを明らかにする。具体的には、廣瀬講師が、日英語の再帰代名詞の多義性に関わる認知的／談話的要因について、西村講師が、英語の tough 構文、日英語の受益構文、英語の道具主語構文、日本語の迷惑受身、英語の結果構文等を意味的、認知的視点から考察する。さらに、岡田講師は、VP 削除や空所化などの統語現象に文と文との結束関係のようなテキストレベルの概念が関与していることを議論し、高見は、英語の場所句倒置を意味的／機能的視点から考察する。扱う現象は以上のように多岐に渡るが、質議の時間を十分に設け、参会者との活発な議論が行なえるようにしたい。

場所句倒置と非対格性

高見健一

本発表では、(1)のような英語の場所句倒置(Locative Inversion)を取り上げ、この構文が適切に用いられるためには、どのような条件が満たされなければならないかを考察する。

- (1) a.*Around the corner smoked a woman.
b. Around the corner smoked a freight train.

従来、(i) この構文には非対格動詞のみ用いられる(Coopmans 1989)、(ii) 後置主語が主題のときのみ適格となる(Bresnan 1994)、(iii) 動詞の意味内容が情報上「軽い」場合にのみ適格となる(Birner 1992, Levin and Rappaport Hovav 1995)などの仮説が提案されたが、この発表では、これらの仮説がいずれも不十分であることを示す。そして、談話機能の観点から、この構文は、主語指示物が提示された場面に存在するか、提示された場面へ／から移動すると解釈できる場合に適格となることを示す。

話者指示性と視点と対比

日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み

廣瀬幸生

英語の再帰代名詞に関して、いわゆる束縛理論では扱えない「例外的な」用法を説明するために、これまで、「話者指示性」(logophoricity)、「視点」(viewpoint, empathy)、「対比」(contrast)などの概念にもとづく分析が提案されてきた。しかしながら、そのような分析では特に次の二点が必ずしも

明確にされていない。一つは、話者指示の現象にも視点の現象にもいわゆる「意識主体」(subject of consciousness)が関与するというだけで、この両者の現象を原理的に区別していないという点である。もう一つは、話者指示・視点の現象と対比的強調の現象は異なるものとして扱うだけで、両者の意味的関連性が原理的に捉えられていないという点である。

本発表では、英語の -self 形を日本語の「自分」と比較検討することで、その共通点と相違点を指摘するとともに、話者指示性・視点・対比の概念をめぐる、日英語再帰代名詞の意味拡張の仕組みを明らかにしたい。

文法現象の中の換喩

西村義樹

佐藤(1978, 1986, 1987)や瀬戸(1986)の先駆的な論考およびLangacker(1984, 1993, 1995)やTaylor(1989)の認知言語学的研究によって、換喩が日常言語に遍在する現象であること、換喩にはわれわれの言語知識の本質(の一面)と密接に関わる重要な機能があること、などが明らかにされている。本発表では、以上の研究成果を踏まえつつ、換喩(的現象)をより包括的かつ明確に特徴づけることによって、さまざまな文法現象を統一的な視点から捉え直すことを試みる。その過程で、(1) 百科事典的な意味論、(2) (図と地の反転、焦点化等の) 捉え方(construal)が言語表現の意味の成立に決定的に関わっていること、(3) 使用基盤(usage-based)モデル、などの認知言語学に特徴的な考え方の重要性も再確認されることになろう。

文の結束関係のタイプと残留要素の形態について

岡田禎之

Kehler(2002)は文同士の結束関係を3タイプに分類し、中でもResemblance relationsとCause-effect relationsの2グループの結束のあり方がさまざまな統語現象の振る舞いに大きく関与していることを論証している。ここでは、VP削除や空所化についてのKehlerの考え方を提示することから話をはじめ、より広範囲の現象説明のためには彼の論を一部修正する必要があることを述べたい。stripping, pseudo-gapping, conjunction reduction, right node raisingなどの振る舞い(の一部)を説明するためにはそのような修正が必要であり、それによって現象説明の範囲が広がることを観察したい。統語現象の説明に、単一文の範囲を超えたテキストレベルの概念が有効性を持っている、少なくともそのような一面がある、ということが確認できれば良いと考えている。